

文化財制度と近代ツーリズム

—— 戦前期における京都と奈良の観光と文化財鑑賞 ——

菅 沼 明 正*

はじめに

1897年、古社寺保存法に端を発する文化財制度が誕生した。明治政府は社寺の建造物と宝物類のうち歴史的・美術的価値の高いものを「特別保護建造物」と「国宝」に定めた。同制度は現在に通ずる文化財保護の起源であると同時に、社寺建造物を建築として、仏像をはじめとする宝物類を彫刻や美術工芸品として鑑賞する新しい慣習が生まれる転機だとされている¹⁾。京都と奈良は日本でも有数の観光都市であるが、両地域の主なイメージを構成するのが文化や伝統、神社仏閣である。文化財鑑賞が一般化するにつれ、二つの地域のイメージもつくられてきたと考えられている。

ところで、明治期につくられた文化財制度については、歴史学者の高木博志が『近代天皇制の文化史的研究』を発表して以降、国民国家形成期における文化面からの国民統合を目的に制度が設計され、当時からそのような政治的意図に沿う形で機能してきたと理解されてきた（文化財制度による国民統合論と呼ばれている²⁾）。この主張に対しては、制度整備時における政治的な意図と受容のされ方には乖離があるのではないかと指摘もあったが、数々の指摘よりも説得力をもって多方面に受け入れられてきた³⁾。

近年、文化面のナショナリズム研究が進展し、「伝統文化」として広く人々に共有されているものが、必ずしも政府の創出の結果ではないことが明らかにされている。たとえば、都市形成と鉄道の普及により庶民の郊外娯楽として定着した初詣や、生産コストと成長速度により植樹が進んだソメイヨシノの花見文化、諸流派の生存戦略と女子教育により普及した茶道など、いずれも政府主導でつくられた伝統文化ではなく、企業の利害関係や生産関係で普及した後に、「日本人」「日本精神」などの意味づけがされた⁴⁾。こうした研究を踏まえ、文化財鑑賞の普及・定着、すなわち一般化についても実証的に研究する段階にあるのではないだろうか。国民国家

* すがぬま あきまさ 九州産業大学

の形成に際して文化財制度が果たす役割に言及するにしても、エリック・ホブズボウムが言うように、「政治的」伝統の創出が成功するかは、どれほど一般大衆に受け入れられるかにかかっているのである⁵⁾。

本稿の目的は、文化財制度による国民統合論を批判的に検証し、文化財鑑賞の普及・定着経緯を検証する上でツーリズムに着目する意義を提示することである。これまでの文化財制度による国民統合を前提とする議論では、社寺宝物や建築を見学・鑑賞する文化財鑑賞は、教育や博物館を通じて早々に普及・定着したと解釈されてきた。本稿では、こうした解釈を修正するとともに、これまで検証のなかったツーリズムという実践面を論じることを試みる。

以下本稿は4章で構成されている。第1章では、文化財制度による国民統合の議論を既存研究より検討する。第2章では、近代ツーリズムに注目する意義について論じる。第3章では、昭和戦前期までの文化財鑑賞の広がり、京都と奈良の比較を交えつつ検討する。第4章では、両地域への修学旅行と文化財鑑賞の関係を検討する。

第1章 文化財制度による国民統合論の検討：設計意図と実現経緯

本章は、まず国民統合論が持つ問題点を整理し、次に近年の研究成果をもとに文化財制度による国民統合論を批判的に検討する。

1 国民統合論の問題点

1990年代以降、日本の近代史を考える上で、文化財問題は重要な意義を持つようになった⁶⁾。欧米のナショナリズム研究の影響を受け、歴史学をはじめとする諸分野において、天皇を中心とする近代国家の形成と文化の関係が検証されるようになったのである。1950年5月制定の文化財保護法では、国宝等に指定される文化財を「貴重な国民的財産」としているが、高木によって日本における文化財保護の起点が「旧慣」保存、すなわち国内外に向けて天皇を君主とする国家の正当性を示すことにあったことが提示された⁷⁾。これを機に美術史学や建築史学、博物館学など多岐にわたる分野で、日本国内の多くの人々が文化財すなわち「国家単位の宝物」を大切に思う意識が、近代における国民統合のイデオロギーの産物であると理解されるようになった。

ところで文化財制度と国民統合については、提示当初より歴史学分野において、いくつかの指摘があった。たとえば鈴木良は、「なぜ統合が可能となったかという視点が弱いように思われる。高木の研究は国民統合を前提に論じているのではなかろうか」と指摘し、また山口輝臣は「古社寺保存を文化財保護とイコールと見做すのは安直にすぎる」と、一部の古社寺に向けた援助の形をとった制度を「旧慣」保存と解釈することについて懐疑的な意見を述べていた⁸⁾。

こうした指摘が生じた理由の一つに国民統合論の応用方法の問題がある。文化財制度と国民統合は、ルイ・アルチュセールの国家論を応用し国民国家の諸制度を論じた、西川長夫の議論をもとにしたものである⁹⁾。簡潔に言えば、フランス国民国家における博物館の役割を前提に、日本においても近代以前の地域共同体を越えた愛国心を持つ国民を作り出すため、明治政府によって文化財制度が政策的につくられたと整理したのである。

ただし、博物館を含む国家の諸制度を国家のイデオロギー装置とする西川の議論は、細かな実態を取捨した理論的な図式整理、すなわち理念型である¹⁰⁾。そこでは、フランスでは中央政府が定めた憲法や議会、軍隊をはじめとする諸制度が国家大の共同性や愛国心を補強したとされ、ルーヴル美術館も同じ文脈から整理されている。しかし博物館研究によれば、国民国家形成期のルーヴル美術館は開館日・時間、入場料・手続き、展示の配置などの面で来館者を増やす努力が行われず、勤労階層より上層の特権者の施設だった¹¹⁾。つまり理念型では博物館は国民国家をつくりあげる上でのイデオロギー装置だが、あらゆる国民国家において国民統合の役割を果たすか、そして仮に果たすとしても国民国家の形成期であるかは検討の余地があるのだ。

こうした問題点がありながらも、文化財制度と国民統合に関する議論は深められなかった。その背景には、明治期以降の文化財関連行政を網羅的に研究する難しさ、たとえば博覧会・博物館行政をとっても中心人物と管轄官庁の変化が多く、文化財制度に関連する諸事例を整理する困難さがあったからだと思われる¹²⁾。また批判の後に求められる文化財制度の機能の実証的な説明が難しいことも一因だっただろう。

2 国民統合論の検証

美術史学や建築史学方面では近年、文化財制度について重要な研究が行われた。一つは古社寺保存法の制定経緯に関するもので、もう一つは京都と奈良の博物館の設置経緯に関するものである。これらは文化財制度による国民統合論に修正すべき点があることを示している。

国民統合の議論では九鬼隆一をはじめとする政策制定の中心人物の思想が重視されるが、平賀あまなと野呂田純一は、法整備の実現に向けた諸団体の動きを検証し、次のことを明らかにした¹³⁾。九鬼が名誉会員を務める京都美術協会は欧州諸国の美術保護の法制度を参考に国宝保存法の整備を目指したが、帝国議会衆議院に提出した3回の請願はいずれも議会で議論されなかった。このため京都美術協会は、当時京都や奈良で活発だった社寺修繕費の政府援助を求める信徒団体の動きと協力関係を築き、代議士30名の賛同が必要な建議案を提出する戦略を採用した¹⁴⁾。その結果、京都美術協会が「社寺界」と合流したことで、美術保護の法整備を目指すはずが、同時に社寺の政府援助、つまり社寺の保護を目指すことになった。同会が1895年に衆議院に提出した建議案は「古社寺保存ニ関スル建議案」となり、議会での趣旨説明も、社寺が明治初期の上地令で社寺領を失い貧窮し、「日本帝国ノ実ニ他ニ比類ナキ所ノ彼ノ国宝ノ

品品ガ何レヘカ段々ト減」じていると、政府の社寺保護が十分でないため「宝物」が流出しているとされた¹⁵⁾。

こうした法整備の背後にあった諸団体の動きは、「社寺界」の協力なしには法制定の実現が難しかったことを示している。法案審議の議事録を分析した社会学者の小川信彦は、社寺の所有物を国宝とすることを問題視した貴族院の質疑に注目し、「国宝」の創出が古社寺への補助をより確実にするための便宜だったのではないかと指摘していた¹⁶⁾。

他方で、文化財制度が帝国博物館（1900年に帝室博物館に改称）の設置事業を遂行する上で、極めて重要な役割を担っていたことが近年の研究で明らかとなった。明治期の「旧慣」保存は歴代天皇陵墓の確定や帝国博物館の設置をはじめ多岐にわたり、互いに影響し合っていたことはよく知られている。だがそれらの優先順位、つまり文化財制度と博物館事業のどちらが主たる政策だったかは十分に検証されてこなかった。九鬼の書簡や当時の新聞記事を整理した『京都国立博物館百年史』は、こうした政策の序列を考える上で有益な研究で、ここでは少し詳しく説明したい。

1888年より宮内省臨時全国宝物取調局で大規模な社寺宝物調査が行われた。この宝物調査の実施理由は、社寺所蔵の宝物の全体把握や海外流出の抑止などいくつかの理由があったが、最も重要な目的の一つは、京都と奈良に新しくつくる帝国博物館の展示物の選定にあった¹⁷⁾。臨時全国宝物取調局と博物館行政を率いた九鬼は、帝国博物館の創設が決まった1891年、京都府知事に宝物調査をもとに作成した目録記載の宝物を、落成後の博物館に移すよう命じた。九鬼の理解では、ヨーロッパには「寺院宝物＝寺院の所有物」という考えはなかった。そこで九鬼は、博物館の拝観料収入を分配する代わりに、優れた宝物を博物館に寄託させ展示しようとしたのである。しかし、出陳を推進する段階になると寺院側がこれに難色を示した。とりわけ奈良では、博物館への寄託が実質的な所有権の譲渡と考えられ、法隆寺や唐招提寺をはじめとする各寺院が固辞した。このため開館時に陳列できたのは帝国京都博物館の借用品を含めても博物館全体の半分だけだった¹⁸⁾。

こうした背景から、九鬼が名誉会員を務める京都美術協会は1891年より、社寺の所蔵や公有私有を問わず「国の装飾と為るべき宝物」を政府の監督内に置くといった、博物館への出陳条項を設けた国宝保存法の請願をはじめたと考えられる。同協会が奈良と京都の信徒団体と協調して「古社寺保存ニ関スル建議案」を衆議院に提出したのが、奈良の社寺が寄託に反発した1895年だった。立法補助機能のある審議会である古社寺保存会を設置し、漸く整備にこぎつけた古社寺保存法では、国宝の博物館出陳について内務大臣に強い権限が与えられた¹⁹⁾。こうした一連の経緯は、文化財制度が博物館の設置経緯のなかで必要となった可能性があることを示している。

以上の二つの研究成果は、文化財制度と国民統合の議論の修正を促すものである。制度設計

時の中心人物の意図と実現に至る経緯には隔たりがあり、制度整備の直後から国民統合の役割を果たしたとは考えにくいためである。

更に踏み込んで言うならば、奈良と京都の古代の寺院に国宝宝物が残置する状態は、九鬼が当初から意図したものではなかった。「旧慣」保存の観点から考えてもそれは明らかである。外賓に「国家の宝物」を見せるならば、防火設備のない古い木造建築の社寺に「国家の宝物」があるという保管環境や、社寺までの未舗装の道程は、日本の文明化の遅れを示すものになっただろう。また大衆に鑑賞させるにしても、以前からある社寺参詣と「国家の宝物の鑑賞」の違いがわかりにくいいため、「愛国心の養成」に直結しなかったと考えられる。仮に九鬼の意図通りに博物館事業が進んでいたならば、国宝となった社寺宝物の多くは京都と奈良の博物館に所蔵・展示され、両地域を訪れる人々は社寺をめぐることも見学・鑑賞できていただろう。

では多くの人々が社寺宝物を文化財として鑑賞したり、国宝に指定された宝物を伝統文化と認識したりするようになった経緯はどこにあるのだろうか。そしてツーリズムに着目する意義はどのように見出すことができるのだろうか。

第2章 文化財制度の機能と検討視角

ここでの目的は既存研究を整理しつつ、ツーリズムに注目する意義を示すことである。文化財制度の機能については、国民統合論の影響もあり、十分に議論が深められてこなかった。文化財制度が「新しく創られた伝統」であることは疑う余地がないが、制度の機能を分析するためには、一般大衆の受け入れ方まで射程に入れる必要があるだろう。そこでは大きくわけて二つの側面を検証しなければならないだろう。一つは社寺の宝物や建物を美術として見学・鑑賞する慣習がどのように形成されたか。もう一つは、文化財に指定された社寺宝物を伝統文化とする認識がいかんして成立したかである。

実は文化財制度の広汎な機能は戦後になってからである。京都と奈良への修学旅行が普及した後、団体でいくつもの社寺をめぐる行為に対して、「伝統文化の見学・鑑賞」という意味づけがされた²⁰⁾。しかも両地域が定番の修学旅行地となりはじめるのは、第4章で述べるように伊勢参宮旅行の経緯地に組み込まれる昭和戦前期のことで、明確に京都と奈良の二つの地域を旅行先とする修学旅行団体が増えるのは戦後になってからである。

ただし、文化財制度の広汎な機能が戦後にあるとしても、そこに至る経緯にはいくつかの段階があったはずである。以下では、思想レベルと政策レベルの議論を整理し、実践面であるツーリズムに注目する意義を明らかにする。

1 思想レベルの議論

明治以降の知識人が社寺の宝物や建築をどう論じてきたかについては研究蓄積がある²¹⁾。なかでも井上章一の仕事は、「最古の木造建築」である奈良の法隆寺に焦点をあて、美術史学者や建築史学者の学説の変遷を検証している²²⁾。

明治期における学者たちの言説は、欧米諸国に対する日本の国際的な立場を反映し、訪日した外国人の直感に依拠して日本の古代とヨーロッパの文化的ルーツの共通点を探る傾向にあった。正倉院の宝物にはペルシア文化の影響が見られ、「第二の正倉院」とも言える法隆寺の宝物群には、古代ギリシャの文化に類似したものが確認できるといった西方伝來說が共有された。しかし日清・日露戦争を経て知識人の間で日本が強国であるという意識が芽生え、古代文化の再評価が歴史学・考古学方面よりはじまり、昭和戦前期には美術史学者たちは日本固有の側面を探るようになった。戦時期においては、古美術や古建築と「日本の精神性」を結びつける論調も見られるようになった²³⁾。

近年においてもこうした明治期以降の言説をもって、日本人の文化財認識が論じられることがある²⁴⁾。しかし注意すべき点は、社寺の宝物や建築について論じる知識人が、当時の知識人全般における代表格とは言い切れず、知識人のなかでマジョリティではなかったことである。明治以降の知識人の日本人論・日本民族論から「日本人の自画像」の論じられ方を検証した小熊英二は、奈良や京都の古社寺に思い入れの強い知識人を除き、中国や朝鮮をルーツとする「輸入文化」として軽視する傾向にあったことを明らかにしている²⁵⁾。

たとえば、自由民権の政治家として知られる大隈重信は、日韓併合にあたり「韓人は日本人と同一」として同化政策を肯定する日鮮同祖論者の一人だったが、韓国は「日本より文明の程度が高かったので、其文明を日本に移したことがある、建築家も、宗教家も、学者も、皆な韓国から聘して来た」、「奈良の法隆寺杯の建築は韓国式で、韓国の人を傭つてやつた」とした²⁶⁾。また、東洋史学の始祖である内藤湖南は、法隆寺金堂を「当時の支那建築を縮本」させたものより劣ると酷評し、さらに東北帝大医学部教授で、人類学に形質測定の統計処理を取り入れた清野謙次は、奈良時代を渡来人と輸入文化に侵された時代と形容した²⁷⁾。そして、記紀神話を通じて古代史を研究した津田左右吉は、奈良や京都の寺院や仏像などを、権力者が中国をまねてつくった「シナ」の輸入文化で、民衆から見ればひどく異質で高圧的なものだったとした²⁸⁾。こうした論調を突き合わせずして、美術史学者や建築史学者の学説を「日本人の文化財認識」とすることはできないだろう²⁹⁾。

もっとも、早くから社寺宝物や建築の見学・鑑賞に関心を持つ者たちはいた。奈良では大正前期頃から、帝室博物館近くの民宿日吉館が文化財鑑賞に関心のある知識人たちの定宿となった³⁰⁾。民宿の宿泊人名簿には、社寺宝物や建築を研究した主要な美術史学者、建築史学者、歴史学者などが名を連ねている(表1)。昭和戦前期まで行われた法隆寺の再建・非再建論争の中

心にいた喜田貞吉や関野貞、法隆寺をはじめ、美術史・建築史の権威となる伊東忠太や石田茂作、大岡実、浅野清、村田治郎、福山敏雄といった「法隆寺学者」と呼ばれた研究者のほぼ全員が日吉館の常客だった³¹⁾。裏を返せば、社寺の宝物や建築に関心を持つ知識人の範囲が限定的だったと言えるだろう。

表1 奈良・日吉館の宿泊者（宿泊人名簿記載）

職業	名前
美術史学者	中川忠順、上野直昭、福井利吉郎、会津八一、藤懸静也、足立康、宮永惣一、田中一松、田沢坦、野間清六、亀田孜、渡辺一
建築史学者	伊東忠太、関野貞、関野克、大岡実、福山敏男、太田博太郎
考古学者	後藤守一、大場磐男
歴史学者	喜田貞吉、黑板勝美、三成重敬、安藤更正、宮川寅雄
国文・国学者	橋本進吉、武田祐吉、久松潜一
作家・評論家	広津和郎、宇野浩二、志賀直哉、小林秀雄、堀辰雄、神西清、武田麟太郎、滝井孝作、阿部知二、勝本清一郎、和辻哲郎、中村光夫、亀井勝一郎、青野季吉、竹山道雄
詩人・歌人・俳人画家	西条八十、吉野秀夫、西東三鬼、水原秋桜子
画家	山口蓬春、正宗得三郎、杉本健吉、小川マリ、桂ユキ子、裕伊之助、長谷川路可、伊藤廉、津高一
彫刻家	山崎朝雲、新海竹蔵、佐藤玄々、平櫛田中、菊池一雄、船越保武、佐藤忠良
工芸家	西出大三、道明新兵衛、滝村謙、縣治郎
写真家	坂本万七、長谷川伝次郎、藤本四八、土門拳
建築家	吉村順三、丹下健三、大高正人
演劇家	横山はるひ、東野栄治郎、芥川比呂志、真山美保、小池朝雄

出典「奈良・日吉館の客たち」『芸術新潮』1963年、14巻7号より筆者作成。

一方で、『古寺巡礼』の著者である和辻哲郎の影響については、紙幅の関係で詳しくは言及しない。若くして哲学者として頭角を現した和辻の著作が同世代の知識人に影響を与えたことは間違いないだろう。和辻は「輸入文化」か否かの二項対立で評価される古代文化について、ニーチェの『善悪の彼岸』を応用して、ルーツや作者がどうであれ日本という土壌ゆえに美術が開花したと論じた³²⁾。社寺の宝物や建築に関心のあった知識人を援護する主張であっただろう。

ただし、和辻の影響力を過大に評価することはできない。京都帝大生時代の谷川徹三は、先生として慕っていた作家の有島武郎から「博物館にて推古期の観音像を見、一見恋着」という便りを受け、ともに社寺をめぐる。谷川は「人間四十を越さないと本当には分からぬ仏像に対するこういう恋着をまだ解すことができなかった」「百済観音を見ても、一向にそれほどのものに思えなかった」と回想している³³⁾。

また和辻が言うように、社寺めぐりとは西洋美術の視点から仏像や建造物を彫刻や建築とし

て見ることを意味した³⁴⁾。『大和古寺風物誌』の著者である亀井勝一郎も、はじめて奈良を訪れた際の目的はギリシャ彫刻と比較して教養を増やすことにあったと回想している³⁵⁾。西洋美術として社寺の宝物や建築を見る視点は、そのような見方を共有しない知識人を京都や奈良の社寺から遠ざけた側面もあった。『古都遍歴』の著者でドイツ文学者の竹山道雄は、「私はヨーロッパにいたときはかなり熱心に古い文化を見てあるいたが、日本ではそれを怠っていた」「日本の古い文化に魅力は感じてはいたが、何となく自分に縁どおい異質のもののように思っていた。それを愛することはある疚しさをもった仕事であり、未来への創造に対してはむしろマイナスになるもののような気がしていた」と回想している³⁶⁾。

以上、思想レベルの議論について、美術史学者や建築史学者の学説を日本人論・日本民族論といった、より広い文脈のなかに位置づける形で整理した。

2 政策レベル：教育政策を中心に

他方で、学校教育における文化財の取り扱いについては、教科書の内容を通時的に調査した太田智己の研究にあるように限定的だった³⁷⁾。これまで「上から」の教育を通じた文化財鑑賞の普及・定着が推察されてきたものの、国定教科書の歴史教育において文化史の扱いは小さく、図画工作では美術鑑賞の教育は重視されなかった。

太田によれば、第1期の『小学校日本歴史』の聖徳太子の記述に、「多くの寺をたて、仏像をもつくりたまへり」と紹介があり、第2期の「聖武天皇」の項には東大寺盧舎那仏の挿絵が加わったが、1920年からの第3期『尋常小学校国史』では、美術史に関するまとまった記述はなかった³⁸⁾。美術史に関する内容が本格的に義務教育の教科書に登場するのは、1946年の第7期『くにのあゆみ』からで、「鎌倉から室町へ」の章では、「経済と文化」の節に「美術工芸」という項目が立てられ、雪舟などの作家の名前、美術作品の写真図版が掲載された。

旧制中学や高校での文化史・美術史教育までを一括りにすることはできないが、義務教育課程において、京都と奈良の社寺宝物や建築を「日本の伝統文化」として紹介する傾向になかったことは明らかで、大口喜六は1933年、帝国議会衆議院の重要美術品ノ保存ニ関スル法律案委員会で次のように述べている³⁹⁾。

日本の人に日本美術の長所が分かっていない。これをどうするかと言うと、私は小学校の教育をして居る内から、その意味を実物教授して、よく分からせることが必要だと常に思う。例えば小学校の教科書の内にも、奈良の大仏のこともありますけれども、果たしてどういう所に特長があって、どういう所が尊いものであるかと言うようなことを、子供の頭に入れ得るだけの教科書がないように思う。…

1929年2月26日の帝国議会衆議院の国宝保存法案委員会でも、東京上野の帝室博物館の平

常時における観覧者の少なさを例に、美術品に対する愛好の欠如が、古美術品の売買と国外流出の要因となっているのではないかとの議論があった。しかし法律に可能なのは、国宝の指定をもって愛好する基準がどこにあるのか示すことまでで、古美術の愛好や尊重は自然に任せるしかないというのが法案委員会の結論だった⁴⁰⁾。

小括

以上、思想レベルと政策レベルにおける議論を既存研究から整理した。文化財に指定された社寺宝物などを「伝統文化」とする認識は、知識人の間においてもすぐには共有されなかった。古代文化への近隣諸国の影響が自明視されたため、社寺宝物や建築に対する評価も分かれた。美術史学者や建築史学者、美術家、評論家などには好意的に評価する者がいた一方で、「日本人とは何か」「日本民族はどのような民族か」といったナショナル・アイデンティティに関心を寄せる知識人の多くは「外来文化」として軽視する傾向があった。また、戦前では、国定教科書における奈良や京都の社寺の扱いが小さく、宝物や建築を「日本の伝統文化」として教育することもなかった。

既存研究の成果を踏まえれば、社寺の宝物や建築を美術として見学・鑑賞する慣習や、文化財に指定された宝物を伝統文化とする認識の形成を、思想面と政策面のみから検証することに限界があると言えるだろう。とくに前者の慣習については、美術史・建築史の学術論争に関わった知識人のなかには、奈良の法隆寺にほとんど足を運んだことがない者もいた⁴¹⁾。社会学研究では周知の事実だが、言説（思想）レベルの議論と社会的な実態を同一視することはできない。知識人の論調があったとしても、そのことをもって文化財鑑賞の普及と見做すことはできないのである。

そこで改めて注目するべきが、実践面である文化財の見学・鑑賞と関係の深いツーリズムである。京都と奈良はいずれも域外からの往来がある観光地として発展した。次章では、両地域の相違点を比較しつつ、文化財制度の機能とツーリズムの役割を検証したい。

第3章 文化財制度とツーリズム

本章は京都と奈良へのツーリズムの拡大が文化財鑑賞を広める役割を果たしたか、両地域を比較しつつ検証する。京都と奈良は古い社寺が多いことや、明治期の社寺宝物調査の対象となったこと、帝国博物館が設置されたことなど、文化財関連行政において共通点がある一方で、地理や交通、人口規模の面で相違点が多く、観光地としても比較が難しい。ただし、異なる発展経緯をたどった両地域において、ツーリズムの拡大が文化財鑑賞を広める役割を果たしたか、観光事業や統計データから粗描はできるだろう。

1 京都と奈良における観光事業の展開

(1) 京都の観光事業

京都市は定期的に博覧会が開催される都市だった⁴²⁾。1871年、京都の西本願寺で日本初の博覧会が開催されて以降、京都府と民間によってつくられた京都博覧会社（のちの京都博覧協会）により、1928年まではほぼ毎年、京都博覧会が開催された。また、産業の奨励と国民の啓蒙を目的とする第4回内国勲業博覧会が1895年、京都の岡崎で開催され、4ヶ月の会期中に113万人が入場した。

大正から昭和戦前期には、皇室奉祝を記念した大規模な博覧会も開催された⁴³⁾。1915年、大正天皇即位大礼を記念した大典記念京都博覧会が開催され、80日間で86万人の入場者があった。1924年には、昭和天皇御成婚と1873年のウィーン万博参加から50年を記念した博覧会が行われた。万国博覧会参加記念博覧会は日本産業協会主催で東京において開催予定だったが、関東大震災により中止となったため、市当局が奉祝事業として事務を継承した。会期は61日間で122万人の入場者を記録した。さらに1928年の昭和天皇即位大礼の際には、大礼記念京都大博覧会が開催され、入場者は318万人にのぼった。

このように、京都は明治以降、博覧会の開催を通じた人の往来が多い地域であり、第4回内国勲業博覧会の開催にあわせて京都電気鉄道会社が開業し市街電車が整備されるなど、博覧会事業が観光地としての基盤をつくる側面があった。

ところで、京都市が観光事業に力を入れたのは昭和期になってからである⁴⁴⁾。『京都市政史』では昭和御大典を契機に1927年7月、京都駅前に市設案内所を設置したことが「市観光事業の近代的発祥の基」と位置づけられている。1930年5月には全国初の観光課を新設し、翌年に全国各地の観光地の連携を目的につくられた日本観光地連合会の会長に京都市長が就任した。1935年には知恩院山門前の市設無料休憩所と、市設二条観光案内所をつくるなど、京都を訪れる人々へ接遇や宣伝を行った。

京都市観光課は「ガイドブック」の刊行にも力を入れた⁴⁵⁾。1932年から『京都名勝』の刊行を開始し、1939年には『京都の彫刻』、1940年代には『京都の仏画』、『京都の障壁画』、『京都史蹟古美術提要』（いずれも1941年刊行）など、専門家に執筆を依頼した美術史書も刊行した。美術史書は専門的な内容ゆえに一般大衆向けの簡易ガイドブックではなかったが、交通情報や所蔵作品の概説、写真図版の記載があり、社寺宝物や建築の見学・鑑賞に関心のある人々向けのガイドブックを兼ねていた。

他方で日中戦争が開戦すると、市当局は時局に合わせて皇室関連の史蹟巡拝も推奨した⁴⁶⁾。1941年刊行の『京都市政史』では、京都市は古代より残る文化と聖蹟史蹟を顕揚し、「広く国民に対し国体明徴、国民精神作興等の精神強化の資材たらしむ」ことが事業の主点だとした⁴⁷⁾。

このように、京都市の観光事業は皇室奉祝を活用する側面があった。駅前案内所の設置は、

大正天皇即位大礼を記念した大典記念京都博覧会の経験から、盛典拝観で訪れる多くの人々に観光を促すものだったと考えられる。日中戦争の開戦後には皇室関連の史蹟巡拝を推奨する一方で、教養層向けの美術史書を立て続けに刊行するなど、「聖地巡拝」を兼ねた観光需要の高まりにも配慮した。1940年の「紀元二千六百年」に市観光課が刊行した『奉祝紀元二千六百年京都近郊案内』には、桃山御陵や乃木神社、平安神宮、御所とともに、三十三間堂や清水寺、金閣寺、嵐山などをめぐる京都遊覧バスの案内があり、伊勢神宮と橿原神宮の「聖地参拝」後の京都訪問を歓迎した⁴⁸⁾。

(2) 奈良の観光事業

他方の奈良市は、定期的に博覧会を開催する都市ではなく、京都のように活発な人の往来が観光地の基盤をつくった地域ではなかった⁴⁹⁾。奈良博覧会社が1893年に営業を止めて以降、奈良で開かれた博覧会は1915年の新日本博物展覧会で、市制三十周年の1928年に御大典記念博覧会の開催が模索されたが、市庁舎移転の反対の声とともに中止となった。

奈良市は市制施行当時から観光を基本方針の一つとし、若草山焼や夜桜電灯、納涼会、角刈りなどの行事や春日神鹿会や春日藤保勝会などの団体に奨励金を交付した。ただしその他の具体策は、宣伝パンフレットや絵葉書の作成、土産物への助成、接客業者に対する講習会などで、観光政策としては貧しかったと『奈良市史』で評価されている⁵⁰⁾。

奈良の観光地化の転機は、鉄道会社による鉄道網の展開、とくに1914年の大阪電気軌道（以下、大軌）による大阪上本町と奈良間の開業にある⁵¹⁾。大阪方面からのアクセスが向上しただけでなく、1926年のあやめ池遊園地の開園など、大軌の沿線開発を背景に、奈良は近隣府県の郊外行楽地として歩みはじめた。そして更に重要な点は、奈良の観光事業が鉄道会社との協力のもとで発展したことである。

奈良における観光事業は行政と鉄道会社が協力して実施したものが少なくない⁵²⁾。たとえば、1928年の春日奥山周遊道路の拡幅は、奈良県公園課が大軌に協力を要請し、大軌の工事費の寄付があって竣成した。また1929年、年中行事の援助や古典芸術・古風俗の研究、郷土舞踊の創成、夜桜・納涼の電灯施設の整備、宣伝用フィルムの製作などを目的として、市役所内に遊覧施設後援会が設立されたが、この母体となったのは県と市、実業協会、そして大軌と奈良電鉄だった。

1932年11月、奈良と大阪において天皇が参加する陸軍特別大演習が行われ、奈良市はその翌月、産業観光課を新設した⁵³⁾。観光課は県や鉄道会社、県下の観光関係団体と協力して、「皇室ブランド」を活用した観光誘致を実施した。

たとえば、市産業観光課は1933年9月、「『大和宣揚』運動の前衛」として、全国の小中学校長宛に「宣言文」を頒布した⁵⁴⁾。その内容は、大和は神武天皇が橿原に皇基を確立してから歴代天皇が都とした聖地で、その聖域の中心地にある奈良市は、国体の再認識や実物教材とし

て絶好の修学旅行地だが、昨今の修学旅行は2、3時間の短時間の巡覧で終わらせている。今後奈良へ来訪する際は「是非共古都二一泊」して、堅実な民族自決思想をもった国民の養成に努めてほしい、というものだった。後述するように、昭和期頃から伊勢神宮参拝を目的とした修学旅行が都市部で広がり、奈良を経由地とするようになった。乗り換えの地として短時間の滞在地となる奈良市が、宿泊客の誘致に皇室を利用したのである。ちなみに、この「大和宣揚」を県と大軌が踏襲し、1930代半ば頃から東京市や横浜市で教育関係者を集めた修学旅行の誘致説明会を開催した⁵⁵⁾。

市の「皇室ブランド」の活用は日中戦争の開戦後に顕著となった。1939年3月15日の『奈良新聞』には、事変による観光客減少を挽回するため、「観光春の陣に駒を進め〈皇軍の武運長久祈願は先ず奈良へ！〉の旗幟も高く、近く本格的宣伝を開始、全国中小学校に宣伝印刷物をバラ撒く外、近くポスター三千枚、名所案内記七千部、案内鳥瞰図一万枚、一枚図案内略図一五万枚、絵葉書などの用意を整へ、京阪神方面を主として遊客の誘致に全力を注ぐ事」となったと報じられた⁵⁶⁾。

以上、京都と奈良の観光事業を概観した。観光地としての発展経緯や規模において違いはあるものの、両地域には昭和戦前期における皇室奉祝や皇室の権威を活用した観光事業に共通点があった。以前から人の往来が活発だった京都市は、誘致よりも案内斡旋に力を入れ、御大典の拝観客の増加を見込んで市内観光を促した。対して鉄道会社の事業拡大とともに人の行き来が増えた奈良市は、鉄道会社を含む観光関連団体と協力し、「皇室の聖地」を活用した。

ところで、両地域が「皇室ブランド」を観光事業に活用した昭和戦前期は、重化学工業の発展を背景に娯楽の大衆化が進んだ時期でもあった。次節では、両地域への観光客の増加が文化財鑑賞を広めるものだったか検証していく。

2 観光客の増加は文化財鑑賞の普及を意味したか？

(1) 観光客増加の実態

大正後期頃からの大衆消費社会の到来は、都市部を中心に娯楽の選択肢を広げ、日帰り行楽客や宿泊旅行者を増やした。戦前においては体系的な観光統計が限られるため、国鉄京都駅(図1)と国鉄および大軌奈良駅の降車客数(図2)を例に往来の変化を見てみたい。

京都駅の降車客数は大正中期頃から増え、1920年代の増加率は顕著だった。昭和天皇の即位大礼のあった1928年には1920年の約2倍にあたる713万人の降車客があり、地域外からの多くの観光客があったと考えられる。奈良市においても同様に、1928年に多くの来訪者があった。大軌開業以前の奈良市街地の窓口は国鉄奈良駅だったが、大阪と奈良を結ぶ路線が開業すると、大軌奈良駅の降車客が増えていった。降車客数の総数は1928年のピーク時においても京都駅の約半分の320万人だったが、皇室奉祝を機会に来訪者が増えた点に共通点があった。

文化財制度と近代ツーリズム（菅沼）

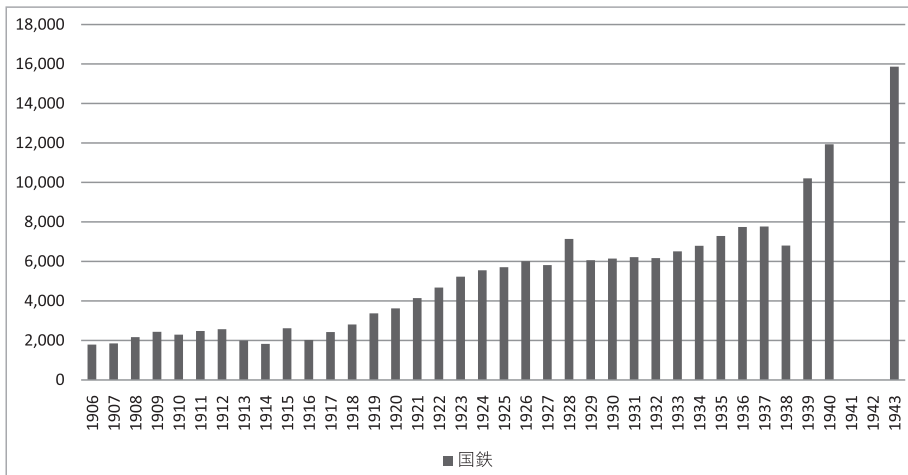


図1 国鉄京都駅降車客数の推移 (単位 千人)
出典『京都市統計書』より筆者作成。

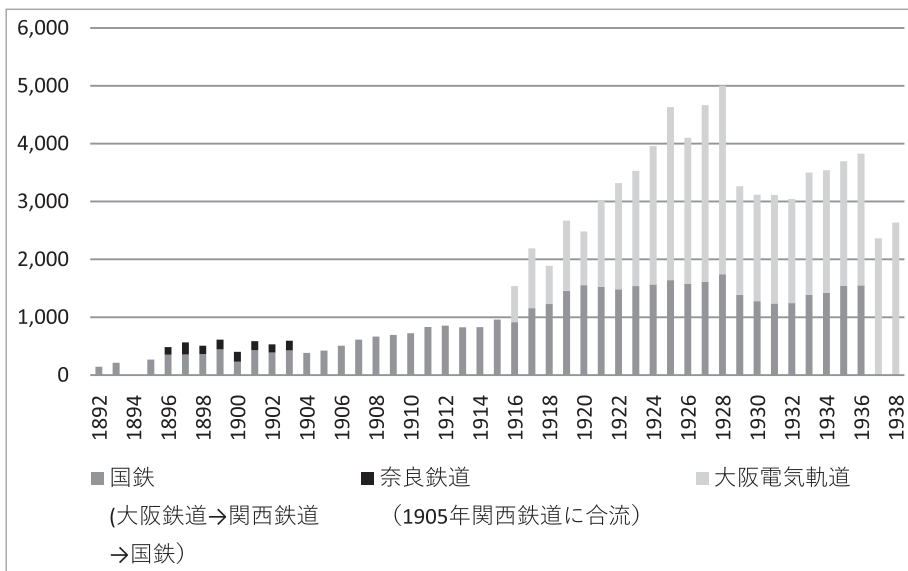


図2 国鉄および大軌奈良駅降車客数の推移 (単位 千人)
出典『奈良県統計書』より筆者作成。

同時期の両都市の宿泊者統計を見ると、降車客数ほどではないが1928年頃に増加の特徴があった。京都市の宿泊者は、明治後期頃から60万人を超える宿泊者があったが、昭和の即位大札のあった1928年には82万人、1929年には108万人を記録した(図3)。大札後の1928年12月から翌年3月末には、式場跡の拝観が許され、京阪電気鉄道や国鉄による旅客誘致が行われた。熊本市にある国鉄時報社が京都御所を目的地とする500名の団体旅行を募集するなど、

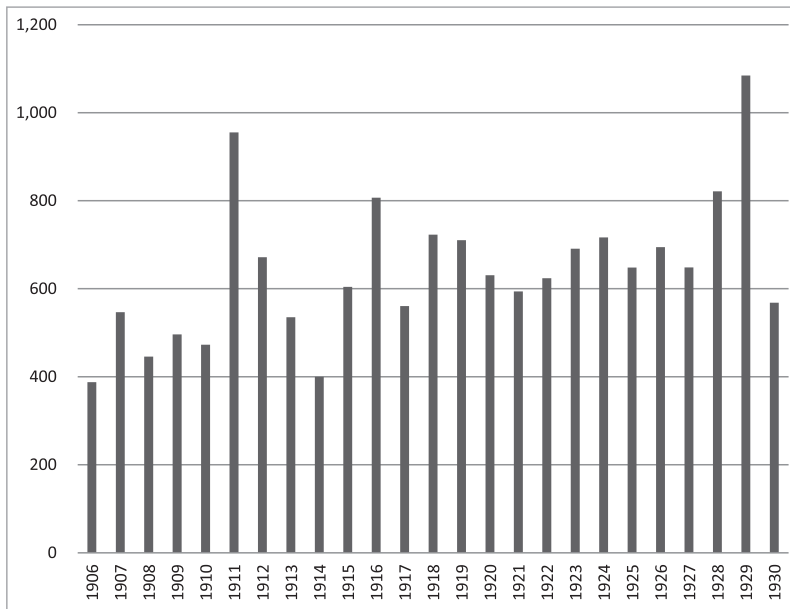


図3 京都市宿泊者数の推移 (単位 千人)
 出典 杉野國明編『観光京都研究叙説』(2008年)より筆者作成。

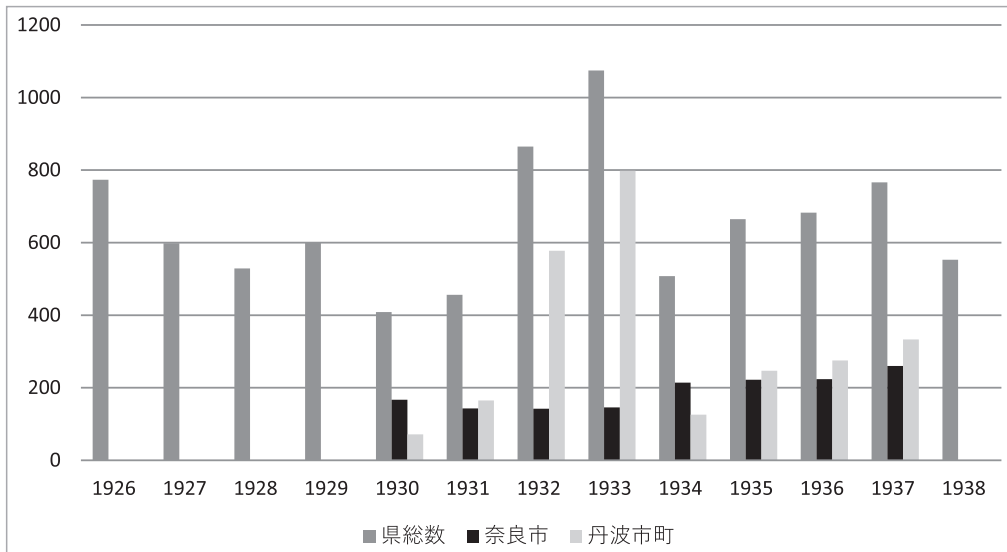


図4 奈良県外からの宿泊者数の推移 (単位 千人)
 出典 『奈良県統計書』「警察・旅舎宿泊人・旅人宿 (宿泊人員・投宿人員)」より筆者作成。

式場跡の拝観者は全国から集まった⁵⁷⁾。

また奈良市については、『奈良県統計書』に1926年から1938年の内国人・他府県宿泊者人員記録 (旅人宿+木賃宿) がある (図4)。1930年以前の奈良市の宿泊者数は不明だが、県全体

の傾向を見る限りにおいて、1928年の降車客数に比例して宿泊者が顕著に増える傾向はなく、昭和大礼時の観光客については日帰り行楽客が占める割合が多かったと考えられる。

一方で両都市に共通している点は、1930年代後半における観光客の増加である。1940年の紀元二千六百年奉祝をピークとする聖蹟観光の活性化により、両都市への観光客が増加した。

1930年代は、第二次産業における軽工業から重化学工業への転換と、日中戦争後の軍需産業の拡大を背景に、工業都市の人口が増加した時期だった⁵⁸。都市部の労働者の増加が娯楽産業の活性化を促し、映画や観劇、遊廓などが盛況となった。さらに日中戦争による徴兵の影響で重化学部門の労働力不足と、工場間の労働者の争奪戦が生じ、厚生省は労働政策の一環として厚生運動、余暇を通じた労働者の活力回復を図るレクリエーションを推奨した⁵⁹。そこでは登山やハイキングとともに宿泊旅行も「健全娯楽」として推奨された。こうした娯楽需要の高まりにより各地の観光客が増加した。

こうした背景から京都と奈良の両地域の降車客数も増加傾向にあった。京都市『市政概要』によれば1930年代後半は80万人を超える宿泊者（外国人宿泊者は1万人ほど）があった⁶⁰。ただし奈良では、1930年代の宿泊者の中心を占めたのは、丹波市町（現天理市）に本部を置く天理教の信徒で、奈良市の宿泊旅行者数の伸びは小さかった。

1940年には娯楽需要に加えて、伊勢神宮と橿原神宮を巡拝する人々で、京都市と奈良市への訪問者が著しく増加した⁶¹。京都駅の降車客数は約1200万人となった一方で、奈良の同時期の降車客数は不明であるものの、奈良県が実施した観光統計がある⁶²。それによると奈良県の延べ日帰り来訪者数は、1939年の2.3倍にあたる3686万人で、奈良市の訪問者数は橿原神宮の所在地である畝傍町（現橿原市）に次いで2番目の819万人（前年の約2倍）を記録した。「聖地巡拝」を口実にした行楽客も少なくなかったと考えられる。

以上のように、両地域の観光客は戦間期から戦時期にかけて増加する共通点があった。1920年代には観光客が増え、昭和天皇の即位大礼で一つ目のピークを迎え、1930年代半ばからの娯楽需要の高まりもあって更に増加した。

(2) 観光と文化財鑑賞の広がり：帝室博物館観覧の実態

こうした観光客の増加は文化財鑑賞の広がりを意味したのだろうか。現在の京都国立博物館と奈良国立博物館の統計資料を手がかりに検証したい（図5、6）。

1895年開館の帝国奈良博物館と1897年開館の帝国京都博物館、そして東京上野の帝国博物館は内務省系（宮内省系）の博物館と呼ばれ、博物館研究においては皇室にゆかりの深い博物館であり、日本の帝国主義化とともに国体論の一翼を担ったとされている⁶³。博物館の展示や企画展の来館者に対する影響を過去を遡って調べることは難しく、文化財鑑賞の普及について博物館がどの程度の役割を果たしたか実証的な検証は困難である。ただし、帝国博物館は社寺の宝物や建築に関心を持って両都市を訪れる知識人たちの必須訪問先の一つだった⁶⁴。

そこで注目したいのは、1920年代以降に両都市の観光客が増えるにつれ、博物館の来館者に変化があったかという点である。人の往来が増えるにつれて文化財鑑賞が定着したならば、優れた宝物を展示する博物館の来館者も増えたはずである。

京都帝室博物館（1924年の京都市への下賜以降は恩賜京都博物館）の来館者数の推移を見てみると、開館初期から戦前のピークに近い来館があったことがわかる。1910年代に平均約5万9千人だった来館者は、1920年代に8万7千人となるが、1930年代には6万6千人と減少している。このため、観光客の増加とともに博物館の観覧が増えたとは言い切れない。

昭和大礼のあった1928年には岡崎公園・二条離宮・恩賜京都博物館を会場とする大礼記念京都大博覧会が開催されたが前後の年よりも来館が少なく、京都市の観光客が顕著に増える1930年代半ば以降においても博物館の利用が進んだ様子はなかった。注目すべきは、美術史学者や建築史学者が古美術や古建築と「日本の精神性」を結びつけて論じた日中戦争開戦後において来館者の大幅な伸びがなく、1940年の「紀元二千六百年」には前年よりも僅かに減少したことである。社寺宝物などの文化財は「皇室の聖地」巡拝の主要な対象ではなかったのである。

一方の奈良帝室博物館は、開館初期の来館者は京都帝室博物館に比べて少なく、時代が下るにつれて少しずつ増加した。『奈良県統計書』に掲載のある来館者統計を見ると、大軌が開業する1910年代半ばから徐々に利用が進み、1920年代に平均8万7千人の来館者があった。1930年代には平均7万5千人とやや減少した。奈良帝室博物館は来館者の構成がわかるため内訳を詳しく見てみたい。

1920年代半ばに来館者数が伸びるが、その中心を占めたのは「教員・生徒」の利用だった。

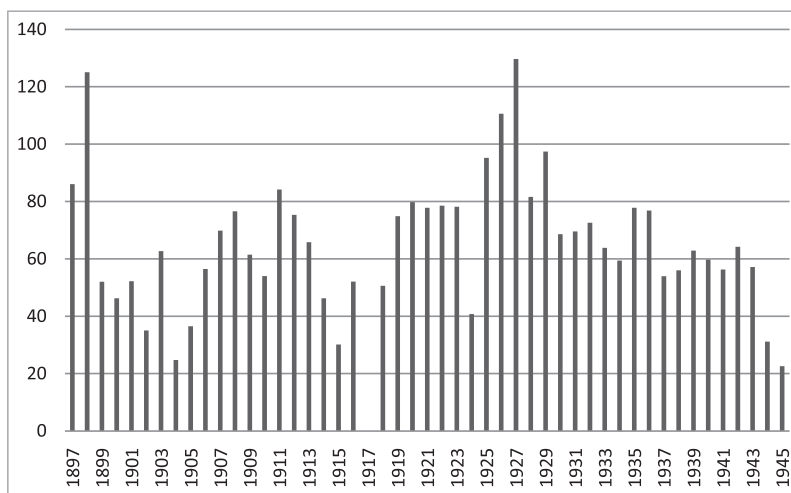


図5 京都帝室（恩賜京都）博物館来館者数の推移（単位 千人）
 出典 『京都国立博物館七十年史』（1968年）154頁より筆者作成。

文化財制度と近代ツーリズム（菅沼）

一般客を示すであろう「大人」の来館が1920年頃から3万人を超えるようになるが、1928年の昭和大礼は最高記録を更新せず（1925年の3万9千人が戦前のピーク）、1930年代においては平均1万7千人へと減少した。他方で、「教員・生徒」の利用は1920年代半ばから進み、1929年に7万1千人と戦前のピークを迎えた。「教員・生徒」というカテゴリーが遠足や修学旅行での利用を示すかは定かでないが、博物館の教育利用が来館者数の増加要因だったことは確かである。京都と同様に日中戦争開戦後において来館者の大幅な伸びがなかった点は重要で、1930年代の「教員・生徒」の来館も年間平均5万3千人と、1929年のピーク時を上回ることにはなかった。

以上、京都と奈良の博物館来館者数の推移を見てきた。両帝室博物館ともに1920年代において来館者は増加したが、両地域における観光客の増加ほどの劇的な増加は見られなかった。前述のように昭和大礼や1930年代において両都市への観光客が顕著に増えた一方で、社寺宝物を美術品として展示する博物館の利用はあまり進まなかった。

こうした博物館の利用実態は、京都と奈良へのツーリズムの拡大が文化財鑑賞の普及を必ずしも意味しなかったことを示している。来館者構成がわかる奈良帝室博物館の主たる利用層が1920年代以降「教員・生徒」であり、一般客の利用者数に大幅な変化がなかったことがそれを傍証している。社寺宝物や建築の見学・鑑賞を扱う「文化財観光」のガイドブックの出版・流通は1920年代から増えはじめ、1930年代になると旅行の大衆化を背景に、安価かつ携行可能なガイドブックの流通が活発となり、たとえばジャパン・ツーリスト・ビューロー日本旅行協会『ツーリスト案内叢書』シリーズの『大和めぐり』（1936年）や『京都地方』（1940年）は、皇室関連の史蹟や官幣大社の紹介を軸としつつ、社寺の美術史の説明も紹介した。ただし、戦

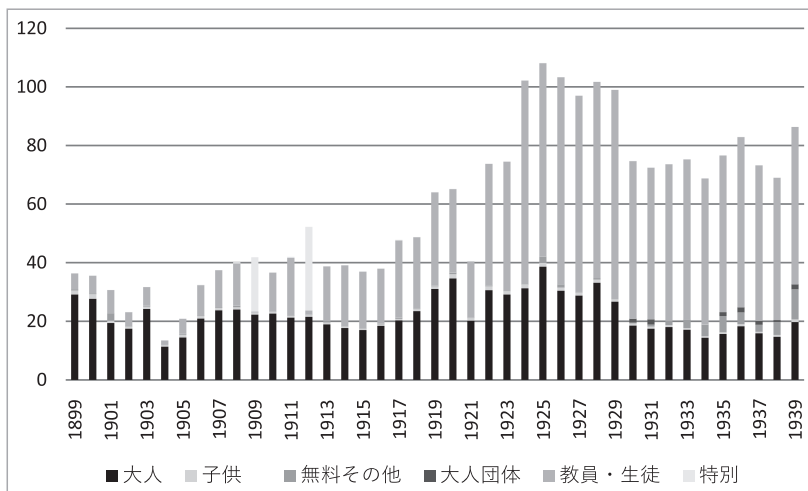


図6 奈良帝室博物館来館者の推移 (単位: 千人)
出典 『奈良県統計書』より筆者作成。

間期から戦時期に娯楽需要が高まり、一般向けの簡易ガイドブックの出版が増えても、両地域において「観光＝文化財鑑賞」とはならなかったのである。

もちろん、京都と奈良の博物館の観覧実態から見える側面には限りがあることは言うまでもない。ただし、奈良において社寺宝物や建築の見学・鑑賞に関心を持つ知識人が帝室博物館近くの日吉館を定宿としたように、博物館は文化財鑑賞において外すことができない訪問先だった。1921年刊行の『近畿古美術案内』では、東京芸術大学美術学部の前身である東京美術学校の旅程の紹介があり、両地域の滞在1日目は帝室博物館を訪問する内容だった⁶⁵⁾。

では、なぜ戦間期から戦時期の観光客が増加した時期に、文化財鑑賞は普及しなかったのだろうか。以下では、京都の昭和大礼と奈良の紀元二千六百年奉祝を事例に若干の考察をする。

(3) ツーリズムの拡大は何を広めたか？

京都と奈良の両地域において人々の往来が増えた結果、何らかの観光が行われたことは間違いないだろう。「観光＝文化財鑑賞」でなかったのならば、両地域へのツーリズムの拡大は何を広めたのだろうか。

(i) 京都：昭和大礼と「名所巡り」

まず京都から見ていこう。1942年7月、京都市教育部文化課は『京都古美術入門』を刊行した。同書は1930年代後半から市が専門家に執筆を依頼した美術史書シリーズの一つで、「極めて初歩的な入門書」として「挿入写真を主として初学者の理解を容易ならしめ」るため、恩賜京都博物館と広隆寺、神護寺、醍醐寺、法界寺、東寺、平等院の7寺院を選び、主に建築、彫刻、絵画を解説した「京都古美術入門の書」だった⁶⁶⁾。

同書は次のことを示唆している。一つは京都において社寺宝物や建築を美術として鑑賞するには「学ぶ」必要があったこと、もう一つは京都における文化財鑑賞の初学者が訪れるべき場所が博物館と7寺院だったことである。これらを踏まえて、昭和大礼の際に出版された観光案内や案内図、遊覧バスが観光客に推奨した内容について整理したい。

昭和大礼においては、鳥瞰図が印刷されたパンフレットや案内書が多数刊行された⁶⁷⁾。たとえば京都府は記念出版物として、写真帖と案内書、鳥瞰図、絵葉書の4種類を国賓や大礼関係者向けに刊行した。また京都市も総頁数740頁の豪華本『京都名勝誌』を編纂し、市主催の大礼記念大博覧会の名所案内絵図なども発行した⁶⁸⁾。府や市だけでなくデパートやホテルもパンフレットを発行した。大丸が鳥瞰図絵師の吉田初三郎に依頼した名所案内鳥瞰図には、当時の大丸の売り場図も掲載された⁶⁹⁾。

当時の出版物の収集には限界があるが、共通点を仮説的に提示するならば、京都における名所が網羅的に紹介されたことである。たとえば『大丸を中心とする京都名所鳥瞰図：御大礼記念』では、京都遊覧として京都駅を起点とする「一日の遊覧」「二日の遊覧」「三日の遊覧」を紹介し、「一日の遊覧」については「豊国神社、恩賜京都博物館、三十三間堂、智積院、大仏

殿、西大谷、清水寺、高台寺、東大谷、八坂神社、円山公園、知恩院、青蓮院、疎水運河、動物園、平安神宮、京都御所、下鴨神社、北野神社、金閣寺、東本願寺」を推奨した⁷⁰。また佐々木猛編『御大典記念京都観光案内』では、観光の日程と順序として1日から1週間の行程を紹介し、1日行程では「東本願寺、三十三間堂、清水寺、八坂神社、知恩院、平安神宮、京都御所、下鴨神社、北野神社、金閣寺、二条離宮」を紹介した⁷¹。さらに京都市教育会編『京を訪ねて』は「学生児童の課外読物として、家庭へのよき土産ともなる事と深く信じて止まない」と、大札を機会に京都を訪れる学校団体向けに出版された案内記だが、「散策（一）～（六）」として東山、木幡から宇治、嵯峨、岡崎、洛北、洛南の名所を紀行文形式で紹介した⁷²。

1928年に京阪電気鉄道が運行をはじめた京都遊覧乗合自動車は、こうした京都の名所遊覧を効率化した。大人3円50銭、子供2円で京都駅を起点に10時間をかけて「桃山御陵、乃木神社、伏見稲荷、三十三間堂、西大谷、清水、八坂神社、知恩院、インクライン、南禅寺、動物園、岡崎公園、平安神宮、相国寺、御所、北野神社、平野神社、金閣寺、二条離宮、興正寺、西本願寺、東本願寺」を巡覧する内容だった。

以上の出版物の事例から推察するに、昭和大札を機会に京都を訪れた人々は、美術史の知識を必要とする文化財鑑賞ではなく、「名勝遊覧」「名所巡り」といった物見遊山を行った。そこでは国宝指定の有無や社寺建築の年代の古さは重視されず、市電や乗合自動車といった近代的な交通機関を駆使した物見遊山が行われた。もちろん、社寺宝物や建築に関心を持ち、美術として見学・鑑賞する人々もいただろうが、そのような関心で恩賜博物館を含めて観覧する人々が大多数を占めることはなかった。

したがって、京都へのツーリズムの拡大は「名所巡り」「名勝遊覧」を広める役割を果たしたと考えられる。そしてその傾向は1930年代になっても変わらなかった。京都市の観光課が1932年から刊行した『京都名勝』やジャパン・ツーリスト・ビューローが1940年に出版した『ツーリスト案内叢書第19号京都地方』も、美術史の簡易的な説明はあるものの、社寺宝物や建築の見学・鑑賞を推奨するものではなく、京都の社寺や史蹟を網羅的に紹介して名所めぐりを促した⁷³。前述のように、京都市観光課が1940年に刊行した『奉祝紀元二千六百年京都近郊案内』には、京阪電気鉄道が運営する一巡8時間の京都遊覧バスの広告掲載があった。

(ii) 奈良：紀元二千六百年奉祝と「娯楽」

他方で奈良においては、鉄道会社の旅客誘致が重要な役割を果たした。前述のように、奈良市の観光地化は鉄道会社による鉄道網の展開の影響を受けた。大軌は旅客誘致に利用できるものは何でも使った鉄道会社である⁷⁴。奈良方面への旅客誘致において文化財鑑賞は宣伝材料に使われたのだろうか。

近鉄GHD保管の大軌発行の路線案内パンフレット（折りたたみ式で展開時26×38cmの傾向）を分析すると、大軌の旅客誘致の戦略は、正月の初詣先の紹介や祭神、御縁日を記載した「神

詣で」をテーマにするものと、大阪を中心とする近隣府県の人々に行楽地を紹介するものだった⁷⁵⁾。前者は『神詣で』(1932年)や『神詣皇陵巡拝』(1935年)というタイトルが付けられ、伊勢神宮と橿原神宮、桃山御陵を中心に神社を紹介した。後者は大軌沿線の観光資源である奈良公園や生駒山上、あやめ池、信貴山、橿原神宮、吉野山といった春秋の行楽の名所と商業娯楽施設を宣伝した。そこには社寺の宣伝も含まれたが、長谷寺は西国第八番の霊場で、牡丹や桜、紅葉の名所として、室生寺は「金堂、五層塔婆は無二の稀観」としつつも、「奇景絶勝」の香落溪までのバス周遊コースの一つで、弘法大師の真言道場として紹介された。

1940年になると若干の変化があり、路線案内に「聖地」橿原参拝後の娯楽の一つとして文化財鑑賞が加えられた。生駒山上までのハイキングコースがある大阪の枚岡公園や、三重と奈良の境にある「絶好のハイキングコース」の赤目四十八滝、「岩石と水流の美に飾られた天下の絶勝」の香落溪、「避暑とキャンプに理想的で冬は絶好のスキー場」の湯の山温泉などと合わせて、薬師寺・唐招提寺と法隆寺が紹介された⁷⁶⁾。薬師寺と唐招提寺では、南都七大寺の一つとして有名で、薬師寺東塔と唐招提寺の金堂・講堂が奈良時代の遺構であること、法隆寺では「金堂内の壁画仏像をはじめ夥しい古美術品が所蔵され当に国宝の宝庫である。」「東院夢殿の救世観音、中宮寺の如意輪観音もまた飛鳥時代の傑作である」とし、付近には紅葉で名高い龍田川があると説明された⁷⁷⁾。

1940年の紀元二千六百年奉祝で奈良を訪れた人々のなかに、「聖地参拝」後の娯楽の一つとして文化財鑑賞をする人々がいた可能性は指摘できるだろう。遊園地などの商業施設からハイキング、スキーなど、多様な娯楽の一つとして路線案内に紹介されたからである。

ただし、日中戦争開戦後に刊行された奈良のガイドブックには、古代の仏教文化を否定的に説明するものが登場し、社寺宝物や建築が「日本文化」や「伝統文化」として大々的に宣伝されなかった点に注意すべきだろう。1938年に大阪毎日新聞社が刊行した『観光ガイド 名古屋・岐阜→三重→奈良』では、奈良について「皇陵を拝し宮址を尋ねて世界に比類なき我が国体の精華を更に深く自覚し、或は古社名刹を訪れて大陸文化の流入した跡に接して日本文化の古き淵源をなほ一層反省すべきである」とあった⁷⁸⁾。また、日本旅行協会刊行『大和めぐり』の1938年丁補再版の序文では、奈良県観光課の囑託や奈良県観光聯合会の参与だった新井和臣が、大和という地名が日本の強大化とともに「日本帝国の始まつた土地—皇国発祥の地といふやうな重い意味を有つものとなった」、仏教の伝来は「西亜文化の襲来たるを意味し、我国民の文化生活に一大変化を与へたものである」が、聖徳太子が「之を撰取善用する方針を定めて後代に伝へ」たとした⁷⁹⁾。

以上のように、鉄道の発達とともに観光地として発展した奈良では、鉄道会社の旅客誘致が観光客の観光行動に影響を与えた。もちろんそれは、鉄道会社が一方的に規定するものではなく、観光客の行動実態から鉄道利用の増加が見込めるものを宣伝材料に採用するといった、相

互的なものだったと考えられる。つまり、「聖地」橿原神宮や季節の名所、商業娯楽施設よりも社寺の文化財鑑賞を目的とする観光客が多ければ、鉄道会社もそれを推奨する旅客誘致を行っただろう。

1936年に大軌参急旅行会が発行した『大和・伊勢・南紀 旅の栞』の冒頭に「近時古美術鑑賞の勃興につれ、出来るだけ新説の収録」に努めたとあるように、奈良へのツーリズムの拡大が文化財鑑賞を広めた側面はあった⁸⁰⁾。だが、1930年代の奈良帝室博物館の来館者数からも明らかなように、観光客の目当ては行楽であり、奈良においても「観光＝文化財鑑賞」とはならなかったのである。

小括

京都と奈良へのツーリズムの拡大が文化財鑑賞を広める役割を果たしたかを見てきた。明治期より博覧会が頻繁に開催される京都市の観光事業と、鉄道会社の事業拡大とともに観光地として発展した奈良市には、ともに皇室奉祝を活用する特徴があった。京都市は来訪者の増加を見込んだ市内観光を斡旋し、奈良市は旅客誘致に力を入れる傾向があった。

両地域とも1920年代以降に観光客が増加した。その内実は、昭和天皇の即位大礼が1920年代のピークに、その後は戦時期の重化学工業の発展を背景に労働者の娯楽需要が高まり、1940年の紀元二千六百年奉祝に向けて来訪者が顕著に増加した。こうした観光客の増加とともに、両地域における文化財鑑賞が広がったか、両地域における帝室博物館の来館者数の変化から検証した。その結果、観光客の増加と比例して博物館の来館者が増える傾向はなく、昭和天皇の即位大礼で来館者を顕著に増やすこともなかった。来館者の構成がわかる奈良では、博物館の教育利用が来館者の増加要因であり一般利用は低調だった。

このように、京都と奈良へのツーリズムの拡大は、必ずしも文化財鑑賞の普及を意味しなかった。両地域の観光客の増加が広めたものは「名所巡り」や行楽だった。国宝に指定された社寺宝物や建築の有無は重視されず、名勝旧跡や名所として著名な場所の遊覧が重視された。

他方で、多様な出身階層の子供たちが参加した旅行の一つに修学旅行がある。戦前における両地域への修学旅行はどのような役割を果たしたのだろうか。

第4章 修学旅行と文化財鑑賞

従来の推察の一つに、京都と奈良は「日本固有の文化という歴史的「伝統」を体現する場」であり、修学旅行の道程は皇室の大札や結婚の報告に訪れたコースと同じであり、社寺の文化財鑑賞があわせて行われたというものがある⁸¹⁾。社寺宝物や建築の見学・鑑賞が戦前の早い段階において修学旅行を通じて一般化したという解釈はしばしば見受けられるが、実際のところ

修学旅行において文化財鑑賞はどのように組み込まれたのだろうか。

1 奈良・京都方面への修学旅行増加の背景

1886年2月に実施された東京師範学校の軍事教練を兼ねた「長途遠足」を起源とし、1888年2月制定の尋常師範学校設備準則で位置づけられた修学旅行は、明治後期頃までに中等教育機関で広く実施されるようになったとされている⁸²⁾。師範学校を卒業して教職に就いた者たちが赴任先の各地の学校で修学旅行を採用したと考えられている。

師範学校における修学旅行の採用要因は、旅費の学校経費への計上にあつたと考えられる。卒業後当該府県で一定年限の服務を義務づける代わりに、授業料と生活を保障した師範学校では、尋常師範学校設備準則にもとづき、修学旅行費用を道府県の師範学校経費に計上する傾向があつた⁸³⁾。他方で、旧制中学校や高等女学校、実業学校、高等小学校の修学旅行は、旅費が生徒負担であつたため、地域や学校によって実状が異なり、毎年継続して実施した学校がどの程度あつたか全体像は明らかになっていない。1900年10月20日の『読売新聞』よれば、自治体の旅費補助があるのが一部の地方にとどまり、中学生の半数が参加できない状況にあつた⁸⁴⁾。

ところで、師範学校や中等教育機関の修学旅行は、実施目的や旅行先が多様で、すぐに特定の地域に集中する傾向はなかつた。たとえば、東京府立第二中学校（現在の東京都立立川高校）は明治期から高学年で遠方へ旅行していたが、「日光・足尾」と「水戸・松島・仙台」、「静岡・名古屋・伊勢」、「桃山御陵・京都」などを目的地とし、毎年同じ旅行先を訪れなかつた⁸⁵⁾。また、近畿圏外の学校が奈良・京都を訪れる場合、大阪や神戸、名古屋をはじめとする都市の周遊旅行の一環で訪問する傾向にあつた。たとえば、山口県立防府高等女学校は大正後期から奈良・京都を旅行先に入れる傾向にあつたが、神戸や大阪、三重（伊勢）、広島（宮島）なども訪問した⁸⁶⁾。

このため、「修学旅行先＝京都・奈良」という旅行先を限定する傾向は、師範学校や中等教育機関ではすぐには生じず、皇室関連の聖地をめぐることが建て前として目的化されるにつれて、京都御所や桃山御陵などがある京都・奈良方面が徐々に主要な旅行先となつたと考えられる⁸⁷⁾。

他方で、昭和初期頃から小学校において伊勢参宮を目的とする修学旅行（以下、参宮旅行）が広がり、1930年代半ば頃から奈良の滞在時間を増やした。

小学校における参宮旅行の拡大の契機は、第一次世界大戦後の外来思想の普及を憂い、児童の伊勢参宮を促した篤志家帯谷伝三郎の役割が大きく、帯谷は大阪市内居住区の小学校の伊勢参宮費用を全額寄付した後、府知事や市長、議員へのロビー活動により、自治体負担の大阪市全小学校5、6年児童の伊勢参宮を実現した⁸⁸⁾。帯谷は1924年に東京でも東京日日新聞と共同

で全市小学校代表児童 588 名を参宮させ、この事業は 1926 年まで合計 3 回実施された。

自治体による旅費補助の手法は大阪近隣にも少しずつ波及し、京都市も 1938 年頃には児童の参宮旅行の費用を全額市で補助するようになった⁸⁹⁾。東京においては小学校数と児童数が少なかった麴町区と本郷区が 1928 年の昭和天皇即位の奉祝記念行事として費用の一部を区が補助する形で旅行を実施し、その後他の区や 1932 年に編入された新市域にも波及した⁹⁰⁾。1934 年に東京市の修学旅行に関する規定が定められると、1938 年にかけて参宮旅行の費用を補助する区が増加した。

小学校の参宮旅行において京都・奈良方面がセットで組み込まれたのは、鉄道会社の旅客誘致の結果だった。桜井・宇治山田間を開通させた大軌が積極的な営業活動を実施し、1931 年から大阪市小学校の参宮旅行が同社線を使うようになった⁹¹⁾。また 1935 年には、大軌が東京銀座に東京案内所を開設し、東京を中心とした学校、青年団、在郷軍人、教化団体、町内会、旅行会、建国会、明治神宮奉賛会、そして東京へ訪問中の地方学校団体を対象に営業活動を行った⁹²⁾。1937 年の大軌社内報では、横浜市や東京市の小学校や中学校の校長など教育関係者を招待する大和史蹟宣揚懇談会を奈良県当局と開催し、「本年度参宮旅行に大和巡りの日程を追加する仮決議をする等、打てば響くの好成績」を収めたとあった⁹³⁾。こうした経緯から、大軌の路線を利用する学校が増え、奈良の滞在時間が長くなったと考えられる。

以上のように、師範学校や中等教育機関においては、皇室関連の聖地をめぐることが建て前として目的化されるにつれて京都・奈良方面が徐々に主要な旅行先となった一方で、小学校においては、参宮旅行の普及と大軌の旅客誘致の結果、京都・奈良方面がセットで組み込まれるようになった。

2 修学旅行の目的と訪問先の傾向

では、京都・奈良方面への修学旅行の増加は文化財鑑賞を広めたのだろうか。以下では、修学旅行用に作成された教材と訪問先を検証する。

(1) 実地研修と教材

奈良女子高等師範学校の修学旅行を検証した高木博志によれば、「身体鍛錬」を目的にはじまった修学旅行は明治後期頃から「実地研修」を組み込みはじめた⁹⁴⁾。奈良女子高等師範学校の立ち上げに携わった水木要太郎は同校の「実地研修」を牽引した人物で、第 5 回内国勧業博覧会の奈良県協賛会の依頼で『大和巡』を著していた⁹⁵⁾。そこでは「韓唐技術の長所を鎔化」した美術が「大和」にあり、法隆寺や薬師寺など「千年以外の建築を存するに至りては天下独大和あるのみ」と説明し、社寺の歴史と仏像などの宝物、建築にも言及があった⁹⁶⁾。

時代は下るが、1922 年の田辺孝次『近畿古美術案内—東京美術学校修学旅行』や、1928 年の大阪市教育部共同研究会編『近畿行脚—史蹟と地理伝説を尋ねて』など、教育方面から作成

された案内書は少なくない⁹⁷⁾。前者は、現在の東京芸術大学美術学部の前身にあたる東京美術学校で作成された美術の専門教育用の教材で、推古時代から江戸時代にかけての建築・絵画・彫刻・工芸品の研究を目的とした全日程17日間の修学旅行用だった。後者の『近畿行脚』は、大阪市小学校共同研究会が編纂した校外教授資料で、交通機関の発達により旅行範囲が拡大するなかで、研究会のメンバーが実地調査を繰り返して作成したものだった⁹⁸⁾。関西私鉄沿線の名勝・旧跡や社寺を網羅し、美術史的な解説や「特別保護建造物」、「什宝」の項目を設けていたが、もともとは小学生を対象としていたため「美術・工芸の鑑賞には、その糸口をも与えていなかった」という。

こうした既存研究で取り上げられる案内書以外にも、京都帝国大学学友会が1915年に発行した『修学旅行京都史蹟案内』、京都府立京都第二高等女学校校友会が1924年に刊行した『近畿地方修学旅行案内』、広島高等師範学校附属中学校が1928年に作成した『京都地方修学旅行案内』など、校外学習用につくられた美術史の知識を紹介する教材は少なくない⁹⁹⁾。

これらの案内書がどのように使われたか、そして校友会が作成したものが定期的に使用されたかは、体系的な旅行記録の調査が途上であるために定かではない。奈良女子高等師範学校の修学旅行実施記録によれば、文献にもとづく史跡・名勝の学習や、古典文学の実地研修、文系・理系の専攻に応じた産業や科学技術の見学など、修学旅行は多様な目的で計画された¹⁰⁰⁾。中等教育機関以上の学校において、京都・奈良方面へ旅行する際に、「修学旅行の目的=文化財鑑賞」と言えないまでも、多様な計画のなかに組み込むことはあっただろう。

ただし、1915年の大正大礼の際に島津製作所が刊行した『修学旅行京都見物案内』は、京都名勝遊覧日程の一日案として「三条大橋、大典記念博覧会、御所、二条離宮、桃山御陵、三十三間堂、清水寺、円山公園、知恩院、八坂神社、四条大橋」を紹介していた¹⁰¹⁾。皇室奉祝で京都を訪れる修学旅行団体も、京都御所と桃山御陵を巡拝するが、その他においては時間が許す限りの名所めぐりが許される側面もあった。

もとより修学旅行の実施記録は断片的であり、今後旅行目的や訪問先の事例研究を積み重ねていくしかないだろう。次節では、判明している旅行記録から仮説的な考察をすることにしたい。

(2) 訪問先

中等教育機関の修学旅行の実態は研究途上で、各地域における実施頻度や旅行の訪問先もわからない点が多い。ここでは太田孝が発掘した伊勢神宮内宮前の土産物店の勢乃屋に残された顧客カードと学校団体の葉のデータをもとに、1930年代半ばにおける中等教育機関の修学旅行の一端を整理したい(表2)¹⁰²⁾。

表にあるように、奈良においては東大寺、春日大社、興福寺といった大軌奈良駅周辺で見学を済ませる傾向があった。法隆寺を訪れる学校もあるが、薬師寺・唐招提寺など美術史学者や

文化財制度と近代ツーリズム（菅沼）

表2 1930年代の中等教育機関の訪問先

	日程	旅程	奈良・訪問先	京都・訪問先
関東商業高校	1936年10月9日～15日 (6泊7日)	東京－二見・山田－ 奈良－大阪－京都－ 神戸－横浜－東京	橿原神宮、神武天皇 陵猿沢池、春日大社、 三笠山、手向山八幡 宮、二・三月堂、東 大寺、興福寺	桃山御陵、乃木神社、 伏見稲荷、豊国神社、 三十三間堂、清水寺、 八坂神社、円山公園、 知恩院、南禅寺、イン クライン、平安神宮、 銀閣寺、御所、金閣寺、 平野神社、東西本願寺、 嵐山、西陣織工場
秋田高等女学校・ 秋田高等家政女学校	1936年5月30日～6月5日 (6泊7日)	秋田－東京－山田－ 奈良－大阪－京都－ 秋田	橿原神宮、吉野宮跡、 如意輪寺、蔵王堂、 奈良公園	東西本願寺、清水寺、 知恩院、御所、金閣寺、 北野神社、嵐山
立正学園高等女学校・ 高等家政女学校	1936年6月1日～8日 (7泊8日)	東京－甲府－京都－ 大阪－奈良－名古屋 －品川	法隆寺、開化天皇陵、 猿沢池、十三鐘、春 日大社、若草山、三 月堂、手向山、二月 堂、大鐘、大仏殿、 正倉院、南大門、博 物館、興福寺	本願寺、本願寺、 三十三間堂、本能寺、 博物館、豊国神社、清 水寺、八坂神社、知恩 院、平安神宮、御所、 下賀茂神社、北野神社、 金閣寺、二条離宮、西 本願寺
広島高等女学校	1936年5月18日～25日 (7泊8日)	広島－大阪－奈良－ 山田－奈良－京都－ 広島	吉野山、橿原神宮、 法隆寺、奈良公園	平等院、京都遊覧
富士見高等女学校	1936年6月2日～7日 (5泊6日)	富士－浜松－豊橋－ 名古屋	奈良公園猿沢池、春 日大社、三笠山、東 大寺、正倉院、興福 寺	桃山御陵、東陵、乃木 神社、インクライン、 北野神社、金閣寺、御 所、平安神宮、知恩院、 南禅寺、円山公園、八 坂神社、清水寺、 三十三間堂、東本願寺、 五条大橋、加茂の堤、 大丸百貨店、新京極

出典 太田孝『昭和戦前期の伊勢参宮修学旅行と旅行文化の形成』（2015年）62～63頁より作成。

建築史学者の評価の高い社寺や博物館を訪問するとは限らず、日本の古代美術の変遷を体系的に学ぶものではなかった。

京都においては、学校間の訪問先に共通点が多いものの、恩賜京都博物館と広隆寺、神護寺、醍醐寺、法界寺、東寺、平等院の7寺院といった『京都古美術入門』で初学者向けに推奨される社寺が多数組み込まれることはなく、観光客の増加とともに広がった「名所めぐり」に近いものが採用された。京都において訪問先の共通点が多い理由の一つに、団体向けの輸送サービスがはじまったことがあげられるだろう。1930年代前半頃から、京都相互タクシー（現、相互タクシー株式会社）が修学旅行向けの案内サービスの提供をはじめた。パンフレットにおいて「今日では幾百名様の団体御乗車でも、連続数十台の自動車を以て熟練した技能と一糸乱れぬ統制とを以て、責任者指揮添乗の上懇切に御説明御案内申し上げます」との説明があった¹⁰³⁾。費用負担が可能な学校がタクシー利用の「名所めぐり」をはじめたのである。

他方で、小学校の参宮旅行の多くは、旅費の問題もあり中等教育機関の修学旅行のように長期旅行はできなかった。東京から4泊5日の場合（伊勢1泊、奈良1泊、車中2泊）、奈良では橿原神宮と畝傍御陵の他に奈良駅周辺を3、4時間、京都では桃山御陵と乃木神社の他に半日で市内見学というように、割当列車の出発時間までに訪問する傾向があった¹⁰⁴⁾。

参宮旅行においては皇室の聖地への訪問が重要視され、その他の名所や旧跡の優先度は低く、社寺宝物や建築の見学・鑑賞に力点は置かれなかった。1936年、子供ツーリスト社から刊行された『こどもの参宮案内』では、「聖武天皇御陵、法華寺、大極殿址、西大寺、薬師寺、三重塔、法隆寺など、古の奈良を偲ぶ古蹟は沢山ありますが、この見物は次の機会に譲つて、これから桃山御陵へ向かひませう」と説明があった¹⁰⁵⁾。

1940年の紀元二千六百年奉祝の際には、延べ387万人の「生徒・学生」の団体が奈良を訪れたが、戦時期の国鉄の輸送逼迫を背景に計画輸送が行われ、修学旅行を含む旅行団体は割当列車の時間内で聖地参拝と奈良と京都の現地見学を行った¹⁰⁶⁾。このため皇室の聖地を除くと、簡易的な「名所めぐり」が行われたと言えるだろう。たとえば、大戦直前に旧制中学校5年生の修学旅行で伊勢神宮、橿原神宮、桃山御陵を参拝した地理学者の中山正民は、当時の旅行について「中学生に神国日本を植え付けることに主眼があったと思われる。京都に泊まったが、別に大きな目的はなく、まったくの自由行動だった。中学5年生の知識としては、清水寺も南禅寺も全く考えていなく、それよりケーブルや京都の私鉄に乗ることのみが目的だった」と回想している¹⁰⁷⁾。

こうした京都と奈良への修学旅行の増加と訪問先の傾向、すなわち皇室の聖地以外において「名所めぐり」が行われたことについては、歴史学者の鈴木良の評価と合致する。鈴木によれば「鳴物入りですすめられた紀元二千六百年事業で「聖地橿原」とか「建国の霊地大和」が強調されて日本精神が鼓舞されたが、その反面で文化財に対する関心は高まることがなかった。奈良県下の社寺は、武運長久を祈願する人でにぎわったものをのぞいて、大方はおとずれるものも少なく、財政的にも逼迫していた」という¹⁰⁸⁾。これを傍証する回想は散見され、たとえば亀井勝一郎は「昭和十二年の頃でさえ、薬師寺や唐招提寺を訪れる人は実に稀であった。観光客や修学旅行の大部分は東大寺の大仏見学だけでおしまいになっていた。法隆寺へ足をのばす人はほんの少数であった」「はじめて薬師寺を訪れたときも、境内には私ひとりきりであった」とし、また戦争末期の奈良県の郡山中学校で教鞭をとっていた民俗学者の宮本常一は、「授業のすんだ後などできるかぎり、学校の付近をあるきまわったものである。法隆寺・法起寺・法輪寺・松尾寺、霊山寺・薬師寺・唐招提寺・菅原寺・西大寺、そのほか奈良の山々をあるいてまわった。薬師寺や唐招提寺などは寺へゆくと鍵を出してくれて「勝手にごらんさない」という。その頃は寺を訪れる人は誰もいなかった。だから仏さまの前に半日すわっていてもよかった」と回想している¹⁰⁹⁾。

小括

京都・奈良方面への修学旅行の増加経緯と、修学旅行用の教材、そして訪問先の傾向から、戦前における修学旅行が文化財鑑賞の普及において果たした役割を見てきた。まず「修学旅行先＝京都・奈良」といった旅行先の限定は、師範学校や中等教育機関においてすぐに生じなかった。特定の地域のみには毎年旅行する慣習は黎明期の修学旅行にはなく、皇室関連の聖地をめぐるものが建て前として目的化されるにしたがい、京都御所や桃山御陵のある京都・奈良方面が周遊旅行に組み込まれるようになった。ただし、中等以上の教育機関の修学旅行では旅行目的が多様で、京都や奈良の訪問が文化財鑑賞の実施を意味するとは限らなかった。現存する校外教育の教材からは、目的の一つとして文化財鑑賞が採用された可能性は指摘できるだろう。

他方で小学校の修学旅行は、参宮旅行が地域行事となり自治体の旅費補助が進む地域において拡大した。京都と奈良が参宮旅行に組み込まれた背景には、鉄道会社の旅客誘致が関係し、大阪や東京の参宮旅行は大軌の営業活動の結果、奈良における滞在時間を延ばすようになった。ただし、小学校の修学旅行は旅行費用に限られるため、現地滞在時間に大幅な制約があった。このため皇室関連の聖地へ訪れることが重視され、社寺宝物や建築の見学・鑑賞は後回しになった。現実的に実施可能だったのは、発着駅周辺の簡易的な名所めぐりだった。

改めて強調するように、中等教育機関の修学旅行の全体像は未解明で、傾向を推察することしかできない。推測の域は出ないが、師範学校や中等教育機関では、部分的にも文化財鑑賞を採用する学校があっただろう。ただし訪問先が判明する事例では、文化財鑑賞よりも「名所めぐり」に近いものが採用されていた。

おわりに

本稿は、文化財鑑賞の普及・定着経緯を検証する上でツーリズムに着目する意義を提示することを目標としてきた。これまでの文化財制度による国民統合が前提とされ、実証的な検証のないまま社寺宝物や建築を見学・鑑賞する文化財鑑賞が、教育や博物館を通じて早々に普及・定着したと解釈されてきた。これに対し本稿は、近年の研究を整理しながら、思想や政策とは異なった実践面であるツーリズムに注目する意義を示し、観光客の増加と文化財鑑賞の普及の関係を京都と奈良の比較の視点を交えて検証した。

文化財制度の機能を考える上で、ツーリズムという実践面を検証することの重要性は提示できたと思う。これまで知識人を中心とする思想（言説）の研究はあったものの、観光客や修学旅行の往来に注目した研究はほとんどなく、戦前においても「京都や奈良への観光＝文化財鑑賞」という暗黙の了解があった。しかし実際には、社寺宝物を美術品として明治期から展示する京都と奈良の帝室博物館は、観光客の増加に応じて来館者を顕著に増やすことはなかった。

観光客の増加によって普及したのは、京都では近代交通機関を使った名所めぐりであり、奈良では鉄道会社が提案した名所や娯楽施設の訪問だった。ここには資料と統計の制約から推察が多分に含まれているが、多方面の資料を可能な限り駆使することで一端を解明できたのではないかと考えている。少なくとも戦前までの京都や奈良の観光を改めて問い直す必要性は提示できたと思われる。

最後に、文化財制度の機能として整理すると、社寺の宝物や建築を美術して見学・鑑賞することや、文化財に指定された社寺宝物を伝統文化とする認識は、限定された範囲の知識人や中等教育機関以上で実地研修を受けた生徒たちには、戦前期において共有された。しかし、一般大衆の受け入れまで射程に入れた場合、文化財鑑賞の慣習や社寺宝物を伝統文化とする広汎な認識が形成されたとは言えないだろう。

今後の課題は、「京都や奈良への観光＝文化財鑑賞」がイメージだけでなく、実践面において、いつ、どのように形成するか検討することである。そこでは、近年の文化面のナショナリズム研究が航海図となるだろう。昭和戦前期までの観光において広がった名所めぐりに、何らかの意義や名前が付けられるのか、それとも全く異なる要因から、新しい観光のあり方として文化財鑑賞が広汎となったのか。ツーリズムも含めた今後の更なる研究が必要となるだろう。

注

- 1) 高木博志『近代天皇制の文化史的研究』（校倉書房、1997年）を筆頭に、歴史学、美術史学、建築史学分野の蓄積は主に、羽賀祥二『明治維新と宗教』（筑摩書房、1994年）、山口輝臣『明治国家と宗教』（東京大学出版会、1999年）、北澤憲昭『眼の神殿—「美術」受容史ノート—』（美術出版社、1989年）、佐藤道信『明治国家と近代美術—美の政治学』（吉川弘文館、1999年）、平賀あまな「古社寺保存法時代の建造物修理手法と保存概念」（東京工業大学学位論文、2001年）、山崎幹泰「明治前期社寺行政における『古社寺建造物』概念の形成過程に関する研究」（早稲田大学学位論文、2003年）、森本和男『文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷』（彩流社、2010年）、清水重敦『建築保存概念の生成史』（竹林舎、2013年）、野呂田純一『幕末・明治の美意識と美術政策』（宮帯出版社、2015年）などがある。また小川伸彦「制度としての文化財」『ソシオロジ』（1991年35巻3号）では、「伝統」が教科書や修学旅行といった教育や博物館展示により広がったとの指摘がある（123頁）。
- 2) 高木前掲『近代天皇制の文化史的研究』第3部。
- 3) たとえば、平賀前掲「古社寺保存法時代の建造物修理手法と保存概念」や森本前掲『文化財の社会史』は、新資料の発掘と検証から古社寺保存法の制定が政策主導者の意図通りに進まなかったことを明らかにしているが、文化財制度による国民統合論の修正は行っていない。近年の研究（村田麻里子『思想としてのミュージアム』（人文書院、2014年）、碧海寿宏『仏像と日本人 宗教と美の近現代』（中公新書、2018年）など）においても、古社寺保存法の制定には日清戦争を背景とするナショナリズムの高揚があったと言及され、宗教学やミュージアム研究といった幅広い分野において文化財制度による国民統合論が支持されていると言えるだろう。
- 4) 佐藤俊樹『桜が創った「日本」 —ソメイヨシノ起源への旅—』（岩波新書、2005年）、平山昇

文化財制度と近代ツーリズム（菅沼）

- 『初詣の社会史 鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム』（東京大学出版会，2015年），クリステン・スーラック『MTM』 日本らしさと茶道一』（さいはて社，2018年）。
- 5) エリック・ホブズボウム，テレンス・レンジャー編『創られた伝統』（紀伊國屋書店，1992年（2007年9刷））408頁。
 - 6) 鈴木良「近代日本文化財問題研究の課題について」『歴史評論』1998年，573号。
 - 7) 政策の中心人物の論調を論拠とし，対外的には幕末に欧米諸国と締結した不平等条約の改正のため，欧州の帝室に倣い天皇家所有の宝物類である御物の登録や博物館の整備を進める一方で，社寺が所蔵する宝物類を「国家単位の宝物」として国宝に指定し，保存・展示することは，民衆に新しい時代の到来と天皇の権威を印象づけると同時に，天皇を中心とする新しい国家の一員である意識を育む目的があった，という主張である。
 - 8) 鈴木前掲「近代日本文化財問題研究の課題について」573号，14頁。山口輝臣『明治国家と宗教』（東京大学出版会，1998年）220～221頁。小川伸彦「宝物・国宝・文化財—モノと象徴のポリティクス／ポエティクス」大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学 記憶・メディア・身体』（文理閣，2009年）78～79頁。
 - 9) 高木前掲『近代天皇制の文化史的研究』13頁。西川長夫「フランス革命と国民統一比較史の観点から」『思想』1990年，789号。西川長夫「国民（Nation）再考—フランス革命における国民創出をめぐる—」『人文學報』1992年，70号。
 - 10) 西川前掲「フランス革命と国民統一比較史の観点から」122～123頁。
 - 11) 高橋雄造『博物館の歴史』（法政大学出版局，2013年）150頁。
 - 12) 博物館行政の複雑さについては，椎名仙卓の研究群（『日本博物館発達史』（雄山閣，1988年），『図解 博物館史』（雄山閣，2000年）など）が詳しく，近年では村田前掲『思想としてのミュージアム』3章が詳しい。
 - 13) 平賀前掲「古社寺保存法時代の建造物修理手法と保存概念」，野呂田前掲『幕末・明治の美意識と美術政策』。
 - 14) 平賀前掲「古社寺保存法時代の建造物修理手法と保存概念」30～32頁。
 - 15) 衆議院議事速記録第23号「古社寺保存ニ関スル建議案」1895年2月4日，379～380頁。
 - 16) 小川前掲「宝物・国宝・文化財」78～79頁。
 - 17) 京都国立博物館『京都国立博物館百年史』（京都国立博物館，1997年），108～109頁。
 - 18) 京都国立博物館前掲『京都国立博物館百年史』111～113頁。
 - 19) 京都国立博物館前掲『京都国立博物館百年史』134頁。
 - 20) 菅沼明正「修学旅行とナショナリズム—戦後の奈良・京都への旅行の再開・拡大過程—」『KEIO SFC JOURNAL』2017年，17巻1号。
 - 21) 井上章一『法隆寺への精神史』（弘文堂，1994年）と小熊英二『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社，1995年）が代表的な研究である。史蹟保存については，齋藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』（法政大学出版会，2015年）が詳しい。
 - 22) 以下の議論の詳細は，井上前掲『法隆寺への精神史』が詳しい。
 - 23) 学問としての美術史学の確立経緯については，太田智己『社会とつながる美術史学 近現代のアカデミズムとメディア・娯楽』（吉川弘文館，2015年）が詳しい。美術史研究分野では，草創期の美術史学について，「美学と史学，考古学と文献史学とのほごまで揺れ動き，その蝙蝠的な立ち位置ないしは鶴とみなされがちだったのが，近代学問という領域のなかの美術史，殊に日本美術史だったろう」という評価もある（角田拓朗『『国華』の確立—瀧精一・辰井梅

- 吉体制下の模索―』『美術フォーラム 21』2013 年 28 号, 51 頁)。
- 24) 真鍋沙由未「戦前日本の文化財保護意識」『世界遺産学研究』2017 年, 5 号など。
 - 25) 小熊前掲『単一民族神話の起源』15 章が詳しい。
 - 26) 大隈重信「対韓意見」『太陽』1906 年 12 卷 5 号, 67~68, 70~71 頁。
 - 27) 『内藤湖南全集』第 6 卷(筑摩書房, 1969~1976 年) 298 頁。清野謙次『日本人種論変遷史』(小山書店, 1944 年) 165 頁。
 - 28) 『津田左右吉全集 別巻 2』(岩波書店, 1989 年) 63~64 頁。
 - 29) 齋藤前掲『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』6 章で詳しく論じられているように, 史蹟名勝天然記念物保存事業において重要な役割を担った国史学者の黒板勝美は, 社寺宝物などを歴史資料ではなく美術と扱う行政や学者たちを好古癖や美術史眼として批判した。
 - 30) 碧海前掲『仏像と日本人』72~76 頁。太田博太郎編『奈良の宿・日吉館』(講談社, 1980 年)。
 - 31) 「奈良・日吉館の客たち」『芸術新潮』1963 年, 14 卷 7 号, 154 頁。
 - 32) 太田哲男『大正デモクラシーの思想水脈』(同時代社, 1987 年) 8 章が詳しい。
 - 33) 『東京朝日新聞』「一冊の本 四五 谷川徹三」1961 年 11 月 16 日。
 - 34) 和辻哲郎『古寺巡礼』(岩波文庫, 2004 年) 36~37 頁。
 - 35) 亀井勝一郎『大和古寺風物誌』(大和書房, 1987 年) 65~66 頁。
 - 36) 竹山道雄『竹山道雄著作集八 古都遍歴』(福武書店, 1983 年) 152~153 頁。
 - 37) 太田前掲『社会とつながる美術史学』127~132 頁。
 - 38) 太田前掲『社会とつながる美術史学』129~130 頁。
 - 39) 第 64 回帝国議会衆議院「重要美術品ノ保存ニ関スル法律案委員会議録第 1 号」1933 年, 8 頁。
 - 40) 第 56 回帝国議会衆議院「国宝保存法案委員会議事録第 4 号」1929 年, 5~6 頁。
 - 41) 言語学者の新村出は法隆寺金堂の火災が生じた 1949 年, 「紙上の空論に些か参加したに過ぎず, 実際の法隆寺はかなりあとまで見に行かなかつた。それも極くザツとした写真で見て, 五重塔等の様式を見てその建築に憧憬しておたに過ぎぬ」。「金堂壁画については, 甚だお恥ずかしい次第だが鑑賞をすることが後まわしになっていて, 自分の専門や興味の上から非常に困却しておた」と述べ, 建築家の藏田周忠も雑誌『建築文化』の「法隆寺座談会」で, 「専門学者の解説を読むのはいくらか読みましたが, さて実物の前にはほんの僅かの時間立ったに過ぎない」と, 自身のことを「一般しろ」との代表と言い, 「或る暗示を信じているというぐらいにしか法隆寺の壁画を知らない」と述べていた(新村出「壁画懐古」『三彩』1949 年 4 月号, 19~20 頁。「法隆寺座談会」『建築文化』1949 年 30 号, 17 頁)。
 - 42) 以下, 京都市『京都市政史 上巻』(京都市, 1941 年) をもとに整理している。
 - 43) 『京都市政史 上巻』655 頁。工藤泰子「御大典記念事業にみる観光振興主体の変遷」丸山宏・伊從勉・高木博志編『近代京都研究』(思文閣出版, 2008 年), 中川祐希「国家儀礼を契機とした景観形成—近代期における京都駅前を事例として—」『人文地理』2017 年 69 卷 3 号を参考とした。
 - 44) 『京都市政史 上巻』662 頁。
 - 45) 太田前掲『社会とつながる美術史学』145 頁。『京都市政史 上巻』667 頁。
 - 46) 工藤泰子「戦時下の観光」『京都光華女子大学研究紀要』2011-2012 年 49 号, 56 頁。
 - 47) 『京都市政史 上巻』665 頁。
 - 48) 工藤前掲「戦時下の観光」57 頁。
 - 49) 以下, 奈良市『奈良市史 通史四』(奈良市, 1995 年) をもとに整理している。

文化財制度と近代ツーリズム（菅沼）

- 50) 『奈良市史 通史四』 473 頁。
- 51) 『奈良市史 通史四』 479 頁。
- 52) 『奈良市史 通史四』 473, 481 頁。
- 53) 陸軍特別大演習については、奈良県立図書館展示資料の解説が詳しい。<https://www.library.pref.nara.jp/sites/default/files/49%20zuroku%20new.pdf>（2022年9月20日最終アクセス）
- 54) 『奈良市史 通史四』 486～487 頁。
- 55) 泉市郎「東京人と『大軌・参急』」『大軌参急』1937年100号, 5頁。
- 56) 『奈良市史 通史四』 488 頁。
- 57) 橋爪伸也『大京都モダニズム観光』（芸術新聞社, 2015年）177～179頁。
- 58) 高岡裕之『総力戦体制と「福祉国家」一戦時期日本の「社会改革」構想』（岩波書店, 2011年）129頁。
- 59) 高岡裕之「観光・厚生・旅行—ファシズム期のツーリズム—」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム 戦時期日本における文化の光芒』（日本経済評論社, 1993年）が詳しい。
- 60) 工藤前掲『戦時下の観光』58頁。
- 61) 菅沼明正「紀元二六〇〇年における奈良県の「聖地」参拝者像」『交通史研究』2019年95号。
- 62) 堀井甚一郎「観光地としての聖地大和」『地理』1941年4巻3号, 281～282頁。
- 63) 村田前掲『思想としてのミュージアム ものと空間のメディア論』137～139頁。
- 64) 和辻哲郎は『古寺巡礼』の出版前年に奈良を訪れた際に帝室博物館を閲覧している（和辻前掲『古寺巡礼』185～186頁）。
- 65) 田辺孝次『近畿古美術案内—東京美術学校修学旅行』（東京美術学校々友会, 1922年）208～209頁。
- 66) 京都市教育部文化課『京都古美術入門』（1942年）序文。
- 67) レファレンス共同データベース https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000157047（2022年9月20日 最終アクセス）
- 68) 杉野暁明『観光京都研究叙説』（文理閣, 2007年）53頁。京都府立総合資料館「デジタル展覧会「京の鳥瞰図絵師 吉田初三郎」鳥瞰図」 <https://www.pref.kyoto.jp/shiryokan/yoshida-t.html>（2022年9月20日 最終アクセス）
- 69) 国際日本文化研究センター所蔵地図データベース『大丸を中心とする京都名所案内鳥瞰図：御大禮記念』https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/zoomify/mapview.php?m=002862936_u（2022年9月20日 最終アクセス）
- 70) 国際日本文化研究センター所蔵地図データベース, 同上。
- 71) 佐々木猛編『御大典記念京都観光案内』（くろふね図案社, 1929年）12頁。
- 72) 京都市教育会編『京を訪ねて』（杉本書店, 1928年）。
- 73) 京都市産業部観光課編『京都名勝』（京都市産業部観光課, 1936年）、ジャパン・ツーリスト・ビューロー『ツーリスト案内叢書第19号京都地方』1940年。
- 74) 平山前掲『初詣の社会史』5章が詳しい。
- 75) 戦前の大軌の路線案内は、古書店やインターネットオークションで入手できるものを含めると数多くあるが、ここでは近鉄 GHD 広報部所蔵のものを分析対象としている。
- 76) 『橿原神宮参拝の栞』（大阪電気軌道, 1940年）。
- 77) 『橿原神宮参拝の栞』には管見の範囲で二つのバージョンがあり、もう一つは法隆寺のみを紹

介していた。

- 78) 大阪毎日新聞社名古屋総局編『観光ガイド 名古屋・岐阜→三重→奈良』（大阪毎日新聞社、1938年）93頁。
- 79) 日本旅行協会『ツーリスト案内叢書 第四輯 大和めぐり』（日本旅行協会、1938年）2頁。
- 80) 安達忠一郎『大和・伊勢・南紀 旅の栞』（大軌参急旅行会、1936年）序文。
- 81) たとえば、高木博志『近代天皇制と古都』（岩波書店、2006年）4章。
- 82) 佐藤秀夫編『日本の教育課題5巻 学校行事を見直す』（東京法令出版、2002年）396～398頁。
- 83) 鈴木建一「明治期の師範教育と修学旅行」『修学旅行』1980年、292号、9～10頁。
- 84) 『読売新聞』「中学生の修学旅行と県費の補助」1900年10月20日。
- 85) 白幡洋三郎『旅行ノススメ』（中公新書、1996年）121頁。
- 86) 西村絢子「学校史に見る高等女学校の修学旅行」『修学旅行』1987年、379号、8頁。
- 87) 高木博志「修学旅行と奈良・京都・伊勢」『近代日本の歴史都市—古都和城下町』（思文閣出版、2013年）は、奈良女子高等師範学校において、理系の産業や科学技術の見学においても、皇室の聖地への訪問が建て前として実施されたことを明らかにしている。
- 88) 平山昇「実業家と伊勢神宮参拝に関する一試論」藤田大誠編『国家神道と国体論 宗教とナショナリズムの学際的研究』（弘文堂、2019年）が詳しい。
- 89) 京都市小学校教員会編『京都を中心とせる校外教育』1938年、572頁。
- 90) 橋本萌『「伊勢参宮旅行」と「帝都」の子どもたち』（六花出版、2020年）3章が詳しい。
- 91) 大阪電気軌道『大阪電気軌道株式会社三十年史』1940年、122頁。
- 92) 「東京案内所が出来ました」『大軌参急』1935年81号、13～14頁。
- 93) 泉市郎「東京人と『大軌・参急』」『大軌参急』1937年100号、5頁。
- 94) 高木前掲「修学旅行と奈良・京都・伊勢」40～45頁。
- 95) 高木博志「水木要太郎時代の奈良女子高等師範学校の修学旅行と学知」久留島浩・高木博志・高橋一樹『文人世界の光芒と古都奈良—大和の生き字引・水木要太郎—』（思文閣出版、2009年）。
- 96) 水木要太郎『大和巡』（奈良県協賛会、1903年）4頁。
- 97) 田辺孝次『近畿古美術案内—東京美術学校修学旅行』（東京美術学校々友会、1922年）、大阪市教育部共同研究会編『近畿行脚—史蹟と地理伝説を尋ねて』（創元社、1928年）。
- 98) 大阪市教育部共同研究会編前掲『近畿行脚—史蹟と地理伝説を尋ねて』4頁。
- 99) 三浦周行監修・西田直二郎・魚澄惣五郎編『修学旅行京都史蹟案内』（京都帝国大学学友会、1915年）、京都府立京都第二高等女学校校友会編『近畿地方修学旅行案内』1924年、広島高等師範学校附属中学校『京都地方修学旅行案内』1928年。
- 100) 高木前掲「修学旅行と奈良・京都・伊勢」41～57頁。
- 101) 島津製作所編『御大典記念 修学旅行京都見物案内』1915年。
- 102) 太田孝『昭和戦前期の伊勢参宮修学旅行と旅行文化の形成』（古今書院、2015年）
- 103) 橋爪前掲『大京都モダニズム観光』177～179頁。
- 104) 菅沼前掲「修学旅行とナショナリズム」281頁。
- 105) 門多榮男編『汽車の窓から沿線見学の出来るこどもの参宮案内』（子供ツーリスト社、1936年）89頁。
- 106) 菅沼前掲「紀元二六〇〇年における奈良県の「聖地」参拝者像」50～53頁。
- 107) 中山正民「これからの修学旅行の在り方 体験学習をもとにして」『修学旅行』1989年、400号、

文化財制度と近代ツーリズム（菅沼）

7 頁。

- 108) 鈴木良編『奈良県の百年 県民百年史 29』（山川出版社, 1985 年）234～235 頁。
109) 亀井勝一郎『歴史の星々』（講談社, 1967 年）244 頁。宮本常一『私の日本地図 14・京都』（同友館, 1975 年）59 頁。

要旨

本稿の目的は、文化財制度による国民統合論を批判的に検証し、文化財鑑賞の普及・定着経緯を検証する上でツーリズムに着目する意義を提示することである。これまでの文化財制度による国民統合論を前提とする議論では、社寺宝物や建築を見学・鑑賞する文化財鑑賞は、教育や博物館を通じて早々に普及・定着したと解釈されてきた。本稿では、こうした解釈を修正するとともに、これまで検証のなかったツーリズムという実践面を論じた。

まず1章では、文化財制度と国民統合の議論を近年の研究をもとに再検討した。この結果、制度設計時の意図と実現に至る経緯には隔たりがあり、制度整備の直後から国民統合の役割を果たしたとは考えにくいことが確認された。2章では、文化財制度の機能を検討するにあたりツーリズムに注目する意義を整理した。ここでは社寺の宝物や建物を美術として見学・鑑賞する慣習や、文化財に指定された宝物を伝統文化とする認識の形成を、思想面と政策面のみから検証することに限界があることを提示した。3章では、京都と奈良へのツーリズムの拡大が文化財鑑賞を広める役割を果たしたか、複数の統計をもとに検証した。その結果、京都と奈良へのツーリズムの拡大が、必ずしも文化財鑑賞の普及を意味しなかったことが明らかとなった。4章では、戦前までの修学旅行が文化財鑑賞の普及に果たした役割を検討した。

これまで文化財制度の機能と観光客や修学旅行の往来に注目した研究は少なく、戦前においても「京都や奈良への観光＝文化財鑑賞」という暗黙の了解があったと言える。しかし、社寺宝物を美術品として明治期から展示する京都と奈良の皇室博物館は、観光客の増加に応じて来館者を顕著に増やすことはなく、観光客の増加によって普及したのは、近代交通機関を使った名所めぐりや、鉄道会社が提案した名所や娯楽施設の訪問だったと言えるだろう。

キーワード：文化財、伝統文化、観光、国民統合、修学旅行

Abstract

The purpose of this paper is to critically examine the theory of national integration through the institution of cultural properties and to present the significance of focusing on tourism in analyzing the historical formation of the custom concerning the appreciation of cultural properties. In previous discussions in Japan, the custom of viewing cultural properties, in which people visit and appreciate the treasures and architecture of shrines and temples, has been interpreted as having been created as a result of the government's education and museum policies. This paper corrects this commonly held interpretation and discusses the practical aspect of tourism, which has not been examined in the past.

In Chapter 1, we modify theories of national integration and the institution of cultural properties based on recent historical research. Results confirm a gap between the institutional design and its realization and show that the institution cannot be considered to have played a role in national integration immediately. Chapter 2 summarizes the significance of focusing on tourism in examining the functions of the institution of cultural properties. It presents the difficulty of examining the formation of the perception of treasures designated as cultural properties as traditional culture from only the perspectives of ideology and policy. In Chapter 3, we examine whether the expansion of tourism to Kyoto and Nara has played a role in promoting the appreciation of cultural properties based on multiple statistics. Chapter 4 examines the relationship between school trips to Kyoto and Nara and the spread of cultural property appreciation before World War II.

Despite the fact that few studies have focused on the function of the cultural property system and the traffic of tourists and school excursions, it can be said that even before World War II, there was an implicit understanding that tourism to Kyoto and Nara was undertaken for the purpose of appreciating cultural properties. However, the Imperial Household Museums

文化財制度と近代ツーリズム（菅沼）

in Kyoto and Nara, which have exhibited treasures of shrines and temples as works of art since the Meiji period, did not noticeably attract visitors as the number of tourists to Kyoto and Nara increased. Prewar tourists did not appreciate cultural properties as traditional culture but visited various famous sites in both regions for entertainment. This paper presents the limitations of interpreting the cultural heritage system as a politically created tradition.

Keywords : Cultural Properties, Traditional Culture, Tourism, National Integration, School Trips